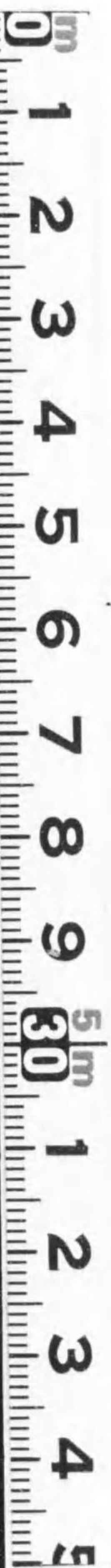


始



特 203  
890



頴原退藏編

校註

俳諧七部集

東京

株式會社  
明治書院



## 例言

一、本書は俳諧七部集に選定された各集を、それ／＼當初單行された原版本によつて翻刻したもので、一般に七部集の研究に資すると共に、又高等程度の諸學校の教科用としても編纂に意を用ゐた。

一、翻刻は成るべく原本の面目を忠實に傳へることに努め、誤字・宛字・假名遣の誤等も改める所がない。たゞ假名遣の誤や甚しい誤字・宛字等には、右傍に小さく括弧を附して正字を記しておいた。又通讀に便する爲、送假名の不足を振假名として補ひ、難讀の漢字にも便宜假名を附けたが、それは原本にもとから附けてある片假名の振假名と區別して、すべて平假名を用ゐた。なほ濁點も便宜上濁る事が明かなものにはこれを加へ、原本にすでに濁點を附してあるものは、右傍に(マ、)と記してこれを分つた。句讀は原本には全くないが、文章や詞書の長いもの等には便宜附することにした。その他少しでも私意を加へた箇所は、一々これを頭註にことわつた。

一、頭註は紙面の都合上多く簡略に従つたが、古來の重要な註釋書は大概涉獵して、その參考すべき説はこれを探ることに努め、また編者の見る所をもまゝ記した。難解の語句についてはほゞ註を加へたが、一句全體の解釋、附合の味などに至つては、もとより限られた紙面のよく盡すべきではない。なほ頭註の不備誤謬については今後の是正を期したい。

一、參考として卷末に俳諧七部集の成立に關する小考を附し、各集の簡単な解説、竝に主要な註釋書をあげておいた。

一、要するに本書は俳諧七部集の本文として、最も信憑すべき定本たる事を専ら期し、なほ研究・教授の便に資する爲、その註釋・解説を若干添へたものである。

一、本書の編纂上杉浦正一郎氏の勞を煩はす事が多かつた。こゝに附記して感謝の意を表する。

昭和十六年一月

編者識

### 俳諧七部集 目次

例言	一
冬の日	一
春の日	一九
曠野	三七
卷之一	四一
卷之二	五〇
卷之三	六四
卷之四	七三
卷之五	七九
目次	三

卷之六	八五
卷之七	九五
卷之八	一九
員外	一九
ひさご	一四九
猿蓑	一六九
卷之一	一七三
卷之二	一八一
卷之三	一九二
卷之四	二〇一
卷之五	二二四
卷之六	二三六
炭俵	三三八

上卷	二四一
下卷	二七五
續猿蓑	三〇三
卷之上	三〇五
卷之下	三二一
俳諧七部集について	三七九

冬  
の  
日  
尾張五哥仙  
全

○狂歌の才士—彼句にある竹齋のこと。竹齋は物語中の人物にして、貧にして鈍なる一庸醫なり。狂歌をよくし、尾張にとままりて狂味を残せり。

○有明の主水—假設の人名なれど、當時京都に「有明」といふ銘酒ありしに因みしか。

○にほひ—色艶。

○日のちり／＼—日没頃をいふ。

笠は長途の雨にほころび、紙衣はとまり／＼のあらしにもめたり。

侘つくしたるわび人、我さへあはれにおほえける。むかし狂哥の才士、此國にたどりし事を、不圖おもひ出て申侍る。

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉 芭蕉

たそやとば<sup>(雑)</sup>しるかさの山茶花 野水

有明の主水<sup>(ちん)</sup>に酒屋つくらせて 荷兮

かしらの露をふるふ<sup>(赤)</sup>あかむま 重五

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき 杜國

日のちり／＼に野に米を<sup>(か)</sup>刈 正平

わがいほは鷺にやどかすあたりにて 野水

髪はやすまをしのぶ身のほど 芭蕉

いつはりのつらしと乳をしぼりすて 重五

きえぬそとばにすご／＼となく 荷兮

○たえしし「絶えし」なり。  
 「堪へし」と解する説もあ  
 れど今採らず。又大和物  
 語・詠曲芦刈の傳との説  
 もあり。  
 ○虚家―明家に同じ。

○さかしし―嶮し、黠し、兩  
 説あり。  
 ○二の尼―官女の尼となれ  
 るものの第二位の人。

○盗人の記念の松―美濃國  
 青野村に熊坂長範物見松  
 あり。  
 ○宗祇の―美濃國郡上郡山  
 田庄宮瀬川のほとりに宗  
 祇の清水あり。東野州常  
 縁、宗祇に古今傳授を受  
 けてこゝまで送り來り、  
 袂を別ちし跡なりと傳  
 ふ。

影法のあかつきさむく火を焼て  
 あるじはひんにたえし虚家  
 田中なるこまんが柳落るころ  
 霧にふね引人はちんばか  
 たそかれを横にながむる月ほそし  
 となりさかしき町に下り居る  
 二の尼に近衛の花のさかりさく  
 蝶はむぐらにとばかり鼻かむ  
 のり物に簾透顔おぼろなる  
 いまぞ恨の矢をはなつ聲  
 ぬす人の記念の松の吹おれて  
 しばし宗祇の名を付し水  
 笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨  
 野 芭 荷 重 芭 野 重 杜 野 荷 杜 芭  
 水 蕉 兮 五 蕉 水 五 蕉 水 五 蕉 兮 五 蕉 兮

○日東の李白―石川丈山を  
 いふ。  
 ○巾に木樞―汝南王璣嘗て  
 絹帽を戴いて曲を打す。  
 玄宗その樞上に紅樞花一  
 朶を置きしに、曲了つて  
 花墜ちざりしといふ故事  
 による。  
 ○琵琶打―琵琶を弾く人。  
 (慶長版日葡辭典)  
 ○居湯―おりゆ。浴場に設  
 備したる風呂。多く杖場  
 を設けず、別に湯を沸か  
 して入るやうにしたるも  
 の。綾はその移し入るる  
 湯を漉すなり。

冬がれわけてひとり唐萱  
 しらくと碎けしは人の骨か何  
 烏賊は忍びすの國のうらかた  
 あはれさの謎にもとけし郭公  
 秋水一斗もりつくす夜ぞ  
 日東の李白が坊に月を見て  
 巾に木樞をはさむ琵琶打  
 うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに  
 箕に鯨の魚をいたゞき  
 わがいのりあけがたの星孕むべく  
 けふはいもとのまゆかきにゆき  
 綾ひとへ居湯に志賀の花漉て  
 廊下は藤のかげつたふ也  
 冬の日  
 野 芭 荷 重 芭 野 重 杜 野 荷 杜 芭  
 水 蕉 兮 五 蕉 水 五 蕉 水 五 蕉 兮 五 蕉 兮



○壯年いまだ―杜甫の曲江  
對酒「更情更覺滄洲遠、老  
大徒傷未拂衣」による。  
(唐詩選)

○ふけれ―鶉の啼くをふけ  
るといふ。

○貞徳の富―松永貞徳。長  
頭丸と云ふ。洛外に桃園  
梅園等の五園を有して晩  
年を悠遊自適せり。

○こゆる―越ゆる、肥ゆる、  
兩説あり。

○淺香―奥州にあり、かつ  
みの名所。

○奥のきさらぎ―實方中將  
の北の方の傍。

○小三太―假設の稱にて郎  
黨などの名。

○かゝり―かゝるは彌縫の  
義。壁の崩壞を防がん爲  
め、細網にて壁を被ひ縛  
れるなり。

○いくらの春ぞ―幾歳ぞの  
意。

○柿のへた―曲齋が「柿の  
たふ」の誤寫なりといへ  
るは妄とすべし。  
○三線―三味線。

おもへども壯年いまだころもを振はず

はつ雪のことしも袴きてかへる  
霜にまだ見る 蕪の食  
野菊までたづぬる蝶の羽おれて  
うづらふけれとくるまひきけり  
麻呂が月袖に鞆鼓をならすらん  
桃花をたをる 貞徳の富  
雨こゆる淺香の田螺ほりうへて  
奥のきさらぎを只なきになく  
床ふけて語ればいとこなる男  
縁さまたげの恨みのこりし  
口おしと瘤をちぎるちからなき

楚 水  
杜 國  
芭 蕉  
荷 兮  
重 五  
正 平  
杜 國  
塾 水  
荷 兮  
は せ を  
野 水

明日はかたきにくび送りせん  
小三太に盃とらせひとつうたひ  
月は遅かれ牡丹ぬす人  
繩あみのかゞりはやぶれ壁落て  
こつくとのみ地藏切町  
初はなの世とや嫁のいかめしく  
かぶろいくらの春ぞかはゆき  
櫛ばこに餅すゆるねやほのかなる  
うぐひす起よ紙燭とぼして  
篠ふかく梢は柿の蒂さびし  
三線からん不破のせき人  
道すがら美濃で打ける碁を忘る  
ねざめくのさても七十

重 五  
芭 蕉  
杜 國  
重 五  
荷 兮  
杜 國  
野 水  
か け い  
芭 蕉  
野 水  
重 五  
芭 蕉  
杜 國

○唐輪—髻より上を二つに分け頂の上にて二つの輪に作る髪の結び方。  
 ○臨濟—臨濟義玄禪師の母の佛となす説あれども、必しも故事に執して解する要なかるべし。  
 ○虚に聲きく—隻手の聲を聞くと同斷の心境。禪門の公案。  
 ○ひとりは云々—此の句平家物語大原御幸の寂光院の佛。  
 ○三日の花—三月三日桃花の節に官女等の美鳥珍禽を合せて競ふさま。  
 ○しらかみいさむ—出羽より越後へ通ふ途中に、白髪・獨活刈の二明神ありとなす説等あり。なほ考ふべし。

奉加めす御堂に金こがねうちになひ  
 ひとつの傘カサの下もと舉もちりさす  
 蓮池ついでに鷺さぎの子遊ぶ夕ゆふま暮  
 まどまどに手てづから薄ウス様さまをすき  
 月にたてる唐輪かぢの髪かみの赤あか枯かて  
 戀こひせぬきぬた臨濟りんぎをまつ  
 秋蟬あきせみの虚うつらに聲こゑきくしづかさ  
 藤ふじの實みつたふ雫しずくほつちり  
 袂たもとより硯いんをひらき山やまかげに  
 ひとりひとりは典侍てんじの局きょくか内侍ないじか  
 三さんヶヶの花はな鸚鵡ひょうろ尾おながの鳥とりいくさ  
 しらかみいさむ越この獨活どくかつ芍しゃく

重おも五ご 荷か 分ぶん 杜と 荷か 分ぶん 野の 水みづ 荷か 分ぶん 野の 水みづ 荷か 分ぶん 芭は 蕉せう 重おも 五ご 野の 水みづ 荷か 分ぶん 芭は 蕉せう 正ただ 平へい 荷か 分ぶん 重おも 五ご 杜と 荷か 分ぶん 芭は 蕉せう 重おも 五ご 芭は 蕉せう 野の 水みづ 荷か 分ぶん 紅べに 花はな 買か 分ぶん 朝あ 月つき 夜よ 双ふた 六む ちの旅りねして

つえをひく事僅に十歩

○霽—此字古書に「しぐれ」に宛て用ひたる例多し。

○あふぎ—熊手の一種。  
 ○かしづきて—茶人が娘を秘藏して大切にするなり。  
 ○すまふ—動詞。  
 ○力を選ばれず—勝負を判じ難しとの意。  
 ○滋賀樂—近江國甲賀郡信樂。

つゝみかねて月とり落す霽しづかな  
 こほりふみ行ゆく水のいなづま  
 齒は朶だの葉はを初狩はつかり人の矢やに負まて  
 北きたの御門ごもんをおしあけのはる  
 馬糞うしん搔かあふぎに風かぜの打うかすみ  
 茶ちやの湯者ゆぢおしむ野のべの蒲か公英へい  
 らうたげに物ものよむ娘むすめかしづきて  
 燈籠とうろうふたつになさけくらぶる  
 つゆ萩はぎのすまふ力を撰ひばれず  
 蕎麥そばさへ青あおし滋賀しや樂がの坊ぼく  
 朝あ月つき夜よ双ふた六むちの旅りねして  
 紅べに花はな買か分ぶん 荷か 分ぶん 野の 水みづ 荷か 分ぶん 芭は 蕉せう 重おも 五ご 野の 水みづ 荷か 分ぶん 芭は 蕉せう 正ただ 平へい 荷か 分ぶん 重おも 五ご 杜と 荷か 分ぶん 芭は 蕉せう 重おも 五ご 芭は 蕉せう 野の 水みづ 荷か 分ぶん 紅べに 花はな 買か 分ぶん 朝あ 月つき 夜よ 双ふた 六む ちの旅りねして

冬の日

○こす―贈り来る。

○佛喰たる―讃州志度浦にて津波にうち寄せられし鰯の腹より恵心作の佛像を得たりといふ話を典故とするは、整に過ぎたり。

○縣ふる―地方に名の知られたるの意。

○花見次郎―假設の人名。

○矢矧の橋―長さ二百八間ありといふ。

○雪の狂―王子猷が雪夜戴安道を訪ひし故事こふまへたり。

○高尾―名高き遊君。

○あだ人―情人。  
○芥子の一重に―七部大鏡に―本来の面目坊が立すがた一目見しより戀となりけり―の歌を、芥子に添へし一休の俳なりと云へり。

○思ひかね―思ひに堪へ兼ね。

○その望の日―前句西行の歌―あくがるゝ心はさても山櫻散りなん後ぞ身にかへりなむ―の趣あるを以て、同じく西行の辭世の歌―願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃―の句を以て承けたり。

○難波津に―萬葉集卷十一「難波人葦火たくやのすしてあれどおのがつまこそとこめづらしき」。

しのぶまのわざとて雛を作り居る  
命婦の君より米なんどこす  
まがきまで津浪の水にくづれ行  
佛喰たる魚解きけり  
縣ふるはな見次郎と仰がれて  
五形董の島六反  
うれしげに囀る雲雀ちりくくと  
眞晝の馬のねぶたがほ也  
おかささや矢矧の橋のながきかな  
庄屋のまつをよみて送りぬ  
捨し子は柴荊長にのびつらん  
晦日をさむく刀賣る年  
雪の狂吳の國の笠めづらしき

野水 重五 荷兮 芭蕉 重五 芭蕉 野水 杜國 荷兮 野水 重五 荷兮

襟に高尾が片袖をとく  
あだ人と樽を棺に吞ほさん  
芥子のひとへに名をこぼす禪  
三ヶ月の東は暗く鐘の聲  
秋湖かすかに琴かへす者  
烹る事をゆるしてはせを放ける  
聲よき念佛藪をへだつる  
かげうすき行燈けしに起佗て  
おもひかねつも夜るの帯引  
こがれ飛たましわ花のかげに入  
その望の日を我もおなじく

はせを 重五 杜國 芭蕉 野水 杜國 荷兮 野水 重五 荷兮 野水 重五 荷兮

なに波津にあし火燒家はすゝけたれど

冬の日

○おのが妻こそ前出萬葉集の歌の句による。

○吹ぬ―「吹かぬ」と訓むべし。

○萩織る笠―萩にて作れる笠なるべし。

○振らする―振賣即ち市中を呼び歩きつゝ賣らするなり。

○胡麻千代祭―七部搜に、上加茂の川上に胡麻を好み給ふ稻荷神あり、その祭をいふと云へど明かならず。

○岩倉―洛北岩倉村。

○三平―三平二滿の語を醜婦の義に用ゐ、オタフクなどと訓み來れり。

炭賣の（己）をのがつまこそ黒からめ、  
 ひとの粧（よそ）ひを鏡磨（トギ）寒（サム）、  
 花（いば）蔭馬骨の霜に咲かへり  
 鶴見るまどの月かすかなり  
 かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日  
 萩織るかさを市に振（ふる）する  
 賀茂川や胡磨千代祭り微（さ）近（ぢ）み  
 いは（行會）くらの聲なつかしのころ  
 おもふこと布搗哥にわらはれて  
 うきははたちを越る三平（三平）  
 捨（すて）られてくねるか鴛の離れ鳥  
 火（ヒ）をかぬ火燧なき人を見む  
 門守の翁に紙子かりて寝る

重 五  
 荷 兮  
 杜 國  
 野 水  
 芭 蕉  
 羽 笠  
 重 兮  
 荷 兮  
 野 永  
 杜 國  
 羽 笠  
 芭 蕉  
 重 五

○冬待つ納豆―當時本郷附近には麴屋多かりしより納豆を附けたり。  
 ○花に泣―花に泣きしの意。  
 ○秋冬―花の山吹に非ず、露の藁なり。これを烟草の如くして飲むこと慶長見聞集卷一等に見ゆ。肺虚の薬といふ。  
 ○釵を鑄る―前句の白燕に因み、玉燕釵の故事などをとり合せたる作意なり。  
 ○八十年を三つ見る―七十三年なり。  
 ○七夕のつま―織女が董永の孝心に感じてその妻となりし故事によるとの説あり。  
 ○桂の花―月をいへり。苔むとは七日の月未だ滿ぜざればなり。

血刀かくす月の暗きに  
 霧下りて本郷の鐘七つきく  
 ふゆまつ納豆たしくなるべし  
 はなに泣（な）櫻の微（おひ）とすてにける  
 僧ものいはず（くわん）冬（とう）を吞（く）  
 白燕濁らぬ水に羽（は）を洗（せん）ひ  
 宣旨かしこく釵（かんざし）を鑄（こ）る  
 八十年を三つ見る童母（わらわ）もちて  
 なかだ（な）ちそむる七夕のつま  
 西南に桂のはなのつぼむとき  
 蘭のあぶらにト木（しめ）うつ音  
 賤の家に賢なる女見てかへる  
 釣瓶に粟をあらふ日のくれ

荷 兮  
 杜 國  
 野 水  
 芭 蕉  
 羽 笠  
 重 兮  
 荷 兮  
 野 永  
 杜 國  
 羽 笠  
 芭 蕉  
 重 五

○はやり来て―所謂はやり正月。鹿島の事ぶれの告にてあらぬ時に正月を祝ふなり。

○つゞみ―鼓。

○南京―奈良の京をいへり。

○いがき―齋垣。

○鎧ふ―鎧を着る。

はやり来て撫子かざる正月に  
つゞみ手向る辨慶の宮  
寅の日の旦を鍛冶の急起て  
雲からうばしき南京の地  
いがきして誰ともしらぬ人の像  
泥にこゝろのきよき芹の根  
粥すゝるあかつき花にかしこまり  
狩衣の下に鎧ふ春風  
北のかたなくく簾おしやりて  
ねられぬ夢を責るむら雨

杜 野 芭 羽 荷 重 芭 羽 杜  
國 水 蕉 筵 兮 五 蕉 筵 國

○イヤ―つくねんと。

田家眺望

霜月や鶴のイヤならびおて

荷 兮

○かりに―略儀に。かりそめに。

○木曾作る―木曾の風景を作る意。

○麻かりといふ集―實にかかる集あるにはあらず。

冬の朝日のあはれなりけり  
檜檜山家の體を木の葉降  
ひきずるうしの鹽こぼれつゝ  
音もなき具足に月のうすくと  
酌とる童蘭切にい  
秋のころ旅の御連歌いとかりに  
漸くはれて富士みゆる寺  
寂として椿の花の落る音  
茶に糸遊をそむる風の香  
雉追に烏帽子の女五三十  
庭に木曾作るこひの薄衣  
なつふかき山橋にさくら見ん  
麻かりといふ哥の集あむ

一五

芭 重 杜 荷 芭 野 羽 杜 芭 野 荷 重 芭 羽 荷 重 芭 野 羽 杜  
蕉 五 國 兮 蕉 水 筵 國 蕉 水 筵 國 蕉 兮 蕉 兮 筵 水 五 國 兮 蕉 水 筵 國

○龍輿―舊説多くろうごしと訓み牢輿と解せり。

○泥の上に―莊子の塗中に尾を曳く龜の故事を併諧化せる手段。

○水のみくすり―注解に、典藥頭水毒を解する御藥を奉るなりと云へり。

○芥子あま―所謂おけし。女兒の髪の毛を頂にのみ小圓形に残したるをいふ。

○飯臺―食卓。僧寮などに用う。

江を近く獨樂菴と世を捨て  
我月出よ身はおぼろなる  
たび衣笛に落花を打拂  
籠輿ゆるす木瓜の山あい  
骨を見て坐到に泪ぐみうちかへり  
乞食の蓑をもらふしのゝめ  
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て  
御幸に進む水のみくすり  
ことにてる年の小角豆の花もろし  
萱屋まばらに炭團つく白  
芥子あまの小坊交りに打むれて  
おるゝはすのみたてる蓮の實  
しづかさ飯臺のぞく月の前

重 芭 荷 羽 野 重 杜 荷 芭 野 羽 杜 重  
五 蕉 兮 笠 水 五 國 兮 蕉 水 笠 國 五

○元政―母に孝なりし深草の元政上人。

○しらす―大家の玄關先、庭先などの白き砂しける處。

○水干―水張にして干したる絹の狩衣。

○山茶花匂ふ―最初の木枯の巻の脇匂と首尾照應せり。

○難面―つれなく、つれなし等と訓む説もあれど、なほつれなきと連體形によむべし。つれなき牛は霞の打つにも驚かざる牛なり。

露をくきつね風やかなしき  
釣柿に屋根ふかれたる片庇  
豆腐つくりて母の喪に入  
元政の草の袂も破ぬべし  
伏見木幡の鐘はなをうつ  
いろふかき男猫ひとつを捨かねて  
春のしらすの雪はきをよぶ  
水干を秀句の聖わかやかに  
山茶花匂ふ笠のこがらし

杜 野 芭 杜 重 野 水  
國 笠 水 蕉 國 五 水 笠

追加

いかに見よと難面うしをうつ霞  
樽火にあぶるかれはらの松

羽 笠

荷 兮

○ちやせん一束にうしろ  
に束ねたる髪。茶筥に似  
たればいふ。  
○檜火に一樽を火になり。

俳諧七部集

一八

とくさ<sup>カ</sup>下着に髪をち<sup>(茶)</sup>やせん<sup>(筥)</sup>して  
檜<sup>しらがね</sup>筥に宮をやつす朝露  
銀<sup>しらがね</sup>に蛤かはん月は海  
ひだりに橋をすかす岐阜山

重 杜 芭 埜  
五 國 蕉 水

貞享甲子歲

京寺町二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

春の日全

○並松一佐屋街道の松なら  
もと云。

○立て一曲齋は立ててとよ  
み、西馬は立ちてとよ  
めり。

○笛を戴く一笛は須磨寺に  
傳ふる青葉笛。但し平家  
物語等によれば敦盛の携  
へたりしは賞は小枝笛に  
して青葉笛にはあらず。

曙見んと、人くくの戸扣きあひて、熱田のかたにゆきぬ。渡し舟さ  
はがしくなりゆく比、并松のかたも見へわたりて、いとのかかなり。  
重五が枝折(重)をける竹塙ほどちかきにたちより、けさのけしきをおも  
ひ出侍る。

二月十八日

春めくや人さまく(マ)の伊勢ま(カ)いり 荷 分  
櫻 ちる 中馬 な がく 連 重 五  
山 かすむ 月 一時(トキ)に 館立(イ)て 雨 桐  
鎧 ながらの火にあたる也 李 風  
しほ風によくく 聞(き)ば 鷗なく 昌 圭  
くもりに 沖の岩黒く見へ(ミ) 執 筆  
須磨寺に汗の帷子脱(ぬ)かへむ 重 五  
を(各)のく(タ)なみだ 笛を戴く 荷 分

春の日



○文王の林—文王靈臺を經始するや庶民之を攻めて日ならずして成せる故事(詩經大雅靈臺)による。  
 ○土つりて—土を持ち運ぶなり。  
 ○角のなき草—婆心錄に角は昔の誤寫なりといへり。従ふべし。雨塊を壊らざるの意なり。  
 ○骨をほどく—死ぬ事を云ふ。

○麥なぐる—麥を打つ。  
 ○梓—梓巫の口寄を聞くなり。

文王のはやしにけふも土つりて  
 雨の雫の角のなき草  
 肌寒み一度は骨をほどく世に  
 傾城乳をかくす晨明  
 霧はらふ鏡に人の影移り  
 わやくとのみ神輿かく里  
 鳥居より半道奥の砂行て  
 花に長男の昏鶯あぐる比  
 柳よき陰ぞこゝらに鞠なきや  
 入かゝる日に蝶いそぐなり  
 うつかりと麥なぐる家に連待て  
 かほ懐に梓さゝゐる  
 黒髪をたばぬるほどに切残し

李 雨 李 荷 重 昌 重 雨 昌 荷 雨 李  
 風 桐 風 兮 五 圭 五 桐 圭 兮 桐 風 兮

○針立—鍼醫。針博士は多く五位なり。  
 ○宮司—當時の讀方多くミヤジと云ふ。

○我名を橋の—大坂海部堀米屋太郎助の架せる橋(七部大鏡)などと特に定むるに及ばず。  
 ○朝熊—伊勢國朝熊山。  
 ○ぼく—ゆるくと歩くさま。  
 ○ほととぎす—朝熊山の麓西行谷にて、芭蕉「芋洗ふ女西行ならば歌よまん」の句あり。甲子吟行に出づ。

いともかしこき五位の針立  
 松の木に宮司が門はうつぶきて  
 はだしの跡も見へぬ時雨ぞ  
 朝朗豆腐を鶯にとられける  
 念佛さぶげに秋あはれ也  
 穂蓼生ふ藏を住ゐに侘なして  
 我名を橋の名によばる月  
 傘の内近付になる雨の昏に  
 朝熊あるゝ出家ぼく  
 ほととぎす西行ならば哥よまん  
 釣瓶ひとつを二人してわけ  
 世にあはぬ局涙に、年とりて  
 記念にもらふ嵯峨の萱畑

昌 雨 重 李 荷 重 李 昌 重 雨 昌 荷 雨 李  
 圭 桐 五 圭 風 兮 五 風 圭 兮 桐 圭 兮 桐 圭 兮

○花と竹とに花・竹をつくるに忙しとなり。

俳諧七部集

二四

いく春を花と竹とにいそがしく  
弟も兄も鳥とりにゆく

昌圭  
李風

○なら坂―奈良市の北。京都に至る通路。

三月六日野水亭にて

且藁

なら坂や畑うつ山の八重ざくら  
おもしろふかすむかたの鐘  
春の旅節供なるらん袴着て  
口すくぐべき清水ながる  
松風にたをれぬ程の酒の酔  
賣のこしたる虫はなつ月  
笠白き太秦祭過にけり  
菊ある垣によい子見てをく  
表町ゆづりて二人髪剃ん

野水  
荷兮  
越人  
羽笠  
執筆  
野水  
且藁  
越人

○太秦祭―九月十二日行はる。牛祭といふ。

○二人―二人の親なり。

○曉いかに―誰かして思の家を出つらむと云へる句に「曉いかに車やる音」と宗祇つけたり。車は法華經の羊車鹿車大白牛車の喩へなり。

○萬日の原―萬日功德の法會を行ふ原。

○湯の山―古くは多く有馬を云ふ。

○筑紫の袂伊勢の帯―温泉場の湯女、諸國より集まるもの風情ならむ。

○軍の中は―新田義貞、勾當内侍の倅なりと(大鏡)。

春の日

二五

曉いかに車ゆくすじ  
鱈負ふて大津の濱に入にけり  
何やら聞ん我國の聲  
旅衣あたまばかりを蚊やかかりて  
萩ふみたをす萬日のほら  
里人に薦を施す秋の雨  
月なき浪に重石をく橋  
ころびたる木の根に花の鮎とらん  
諷盡せる春の湯の山  
のどけしや筑紫の袂伊勢の帯  
内侍のえらぶ代々の眉の圖  
物おもふ軍の中は片わきに  
名もかち栗とぢと申上ゲ

荷兮  
且藁  
越人  
羽笠  
野水  
越人  
野水  
羽笠  
野水  
荷兮  
越人  
羽笠  
野水



尋よる坊主は住まず錠おりて  
解てやをか<sup>(註)</sup>ん枝むすぶ松

今宵は更たりとてやみぬ。同十九日荷兮室にて

咲わけの菊にはおしき白露ぞ

秋の和名<sup>(註)</sup>にかゝる順

初雁の聲にみづから火を打ぬ

別の月になみだあらはせ

跡ぞ花四の宮よりは唐輪<sup>(註)</sup>にて

春ゆく道の笠もむつかし

永き日や今朝を昨日に忘るらん

簀の子茸生ふる五月雨の中

紹鷗<sup>(註)</sup>が瓢はありて米はなく

連哥のもとにあたるいそがし

野水  
冬文

越人  
旦藁

冬文  
旦藁

荷兮  
野水

越人  
旦藁

野水  
冬文

瀧壺に柴押まげて音とめん

岩苔<sup>(註)</sup>とりの籠にさげられ

むさぼりに帛着てありく世の中は

菴二枚もひろき我菴

朝毎の露あはれさに麥作ル

碁うちを送るきぬの月

風のなき秋の日舟に網入よ

鳥羽の湊のおどり笑ひに

あらましのさこね筑摩も見て過ぬ

つらく一期聾の名もなし

我春の若水汲に晝起て

餅を喰つゝいはふ君が代

山は花所のこらず遊ぶ日に

春の日

二九

冬文  
旦藁

越人  
旦藁

荷兮  
野水

野水  
冬文

○咲わけの—以下前の「解てやをか<sup>(註)</sup>ん」につゞけしなり。  
○秋の和名—源順が和名抄の秋の部の稿に取かゝりたりとの作意。

○四の宮—洛東山科の附近。  
○唐輪—八頁頭註参照。

○簀の子茸—狐の傘とも云ふ、一日にして成長す。  
○紹鷗—堺の人、名高き茶の湯者。利休の師也。  
○連歌のもと—もとは會主。

○瀧壺に—後醍醐院の御時吉田家にての御連歌に瀧の響の爲め開分かれざりしを、爲教少將山より柴を折り來りて瀧の落つる所に塞ぎ、水の音をとめし故事(井蛙抄)による。

○あらまし—心あて。  
○さこね—雜魚寢。洛北大原などの古き俗習。  
○筑摩—近江坂田郡。筑摩祭に名高し。

越人  
旦藁

冬文  
旦藁

越人  
旦藁

野水  
冬文

野水  
冬文

荷兮  
野水

越人  
旦藁

くもらず<sup>(マ)</sup>てらず<sup>(マ)</sup>雲雀鳴也 荷 兮

追加

三月十九日舟泉亭

山吹のあふ<sup>(マ)</sup>なき岨<sup>(マ)</sup>のくづ<sup>(マ)</sup>れ哉 越 人

蝶水のみにある、岩はし 舟 泉

きさらぎ<sup>(マ)</sup>や餅洒<sup>(マ)</sup>すべき雪ありて 聽 雪

行幸のために洗ふ土器<sup>(マ)</sup> 蝨 髭

朔日を鷹もつ鍛冶のいかめしく 荷 兮

月なき空の門はやくあけ 執 筆

春

昌陸の松とは盡ぬ御代の春 利 重

○餅洒すー餅米をさらす謂か。木曾名物水餅か等曲齋云へり。

○鷹もつ鍛冶ー大鏡に細川三齋等、一國一城の主の鍛冶する人をさすかと云へり。

○昌陸ー里村氏、連歌の宗匠たり。玉松の葉のあり數や御代の春の句ある由(標註)。

○芍薬園ー貞徳の五園の一。

○腰てらすー白氏文集卷卅七「暖床斜臥日聴腰」。

元日の木の間の競馬足ゆるし	重 五
初春の遠里牛のなき日哉	昌 圭
けさの春海はほどあり麥の原	雨 桐
門は松芍薬園の雪さむし	舟 泉
鯉の音水ほの闇く梅白し	羽 笠
舟くの小松に雪の残り	且 藁
曙の顔牡丹霞にひらきけり	杜 國
腰てらす元日里の睡りかな	犀 夕
星はらくかすまぬ先の四方の色	吞 霞
けふとても小松負ふらん牛の夢	聽 雪
朝日二分柳の動く匂ひかな	荷 兮
先明 <sup>(マ)</sup> て野の末ひくき霞哉	同 兮
芹摘 <sup>(マ)</sup> とてこけて酒なき瓢哉	且 藁

春の日

のがれたる人の許へ行とて

みかへれば白壁いやし夕がすみ  
古池や蛙飛こむ水のをと  
傘張の睡り胡蝶のやどり哉  
山や花墻根くの酒ばやし  
花にうづもれて夢より直に死んかな

春野吟

足跡に櫻を曲る菴二つ  
麓寺かくれぬものはさくらかな  
榎木まで櫻の遅きながめかな

饞別

藤の花たゞうつぶいて別哉  
山畑の茶つみをかざす夕日かな

越人 芭蕉 重五 龜洞 越人 杜國 李風 荷兮 越人 重五

蚊ひとつに寐られぬ夜半ぞ春のくれ

同

夏

○山鳥の尾は一人磨の「あしびきの山鳥の尾の」の歌をふめり。

ほととぎすその山鳥の尾は長し  
郭公さゆのみ焼てぬる夜哉  
かつこ鳥板屋の脊戸の一里塚  
うれしきは葉がくれ梅の一つ哉  
若竹のうらふみたる雀かな  
傘をたしまで螢みる夜哉

武藏坊をとぶらふ

○すゞかけ―繡毬花。此花の如き篠掛の衣を着て奥に下り此衣川にて死しけると古しへをおもひし心なりと(通旨)。

すゞかけやしてゆく空の衣川  
逢坂の夜は、笠みゆるほどに明て  
馬かへておくれたりけり夏の月

九白 李風 越人 杜國 龜洞 舟泉 商露 聽雪

○知足之足常足—老子四十六章の語。

○雜水—雜炊。

○箒木は—信濃園原の箒木に因める作意。

○萱草—花は黄褐色單瓣又は黄赤色重瓣にして色彩強し。

○譬喩品—法華經にあり。句は此六月の暑さは猶火宅にあるがごとしとの意。

老聃曰知足之足常足

夕がほに雜水あつき藁屋哉  
 箒木の微雨こぼれて鳴蚊哉  
 はき木はながむる中に昏にけり  
 萱草は随分暑き花の色  
 蓮池のふかさわする、浮葉かな  
 曉の夏陰茶屋の遅きかな  
 夏川の音に宿かる木曾路哉  
 譬喩品ノ三界無安猶如火宅といへる心を  
 六月の汗ぬぐひ居る臺かな  
 脊戸の畑なすび黄ばみてきりくす  
 越人  
 柳雨  
 塵交  
 荷兮  
 同  
 昌圭  
 重五  
 越人  
 且藁

秋

貧家の玉祭

○雲折々—山家集に「なかなかに時々雲のかゝるこそ月をもてなすかざりなりけれ」。

○瓦ふく家—齋宮の忌詞にて寺をいふ。

八島をかける屏風の繪をみて

玉まつり柱にむかふ夕かな  
 雁さしてまた一寐入する夜かな  
 雲折々人をやすむる月見哉  
 山寺に米つくほどの月夜哉  
 瓦ふく家も面白や秋の月  
 具足着て顔のみ多し月見舟  
 待戀  
 こぬ殿を唐黍高し見おろさん  
 閑居増戀  
 秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな  
 朝負はすゑ一りんになりにけり  
 越人  
 雨桐  
 芭蕉  
 越人  
 野水  
 同  
 荷兮  
 荷兮  
 舟兮  
 泉

春の日

三五

○末一輪—淨瑠璃などの末一段にもちりしなり。

冬

馬はぬれ牛は夕日の村しぐれ 杜 國

○芭蕉翁を貞享元年のこ

となり。

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申 大垣住 如 行

○葬の子一葬の實。

雪のはら葬の子の薄かな 昌 碧

馬をさへながむる雪のあした哉 芭 蕉

行燈の煤けぞ寒き雪のくれ 越 人

芭蕉翁をおくりてかへる時

この比の氷ふみわる名残かな 杜 國

隠士にかりなる室をもうけて

あたらしき茶袋ひとつ冬籠 荷 兮

○才一寅。

貞享三丙子年仲秋下浣

寺田重徳板

阿 羅 野 上、下、員外



○蓬左―熱田神宮を蓬萊宮といふより、熱田の西の意即ち名古屋をいふ。

○ひと、せ―貞享元年。

○柳櫻の錦を―秦性法師「見渡せば柳櫻をこき交ぜて都ぞ春のにしきなりける」。

○糸遊の―朗詠集に「霞晴れ緑の空も長閑けてあるかなきかに遊ぶ糸遊赤人」。

○姫ゆりの―山家集に「雲雀上るあら野に生る姫百合の何につくともなき心哉」。

○無景―廣大にして廣くきはまりなき意なり(浦良)。

尾陽蓬左樞木堂主人荷分子、集を編て名をあらふといふ。何故に此名有事をしらず。予はるかにおもひやるに、ひととせ此郷に旅寐せし<sup>一折</sup>おりくの云捨、あつめて冬の日といふ。其日かげ相續て春の日また世にかゞやかす。げにや衣更着やよひの空のけしき、柳櫻の錦を争ひ、てふ鳥のをの<sup>(己)</sup>がさまなる風情につきていさゝか實をそこなふものもあればにや、いと<sup>(糸遊)</sup>いふのいとかなる心のはしの、有かなきかにたどりて、姫ゆりのなにもつかず、雲雀の大空にはなれて、無景のきはまりなき、道芝のみちしるべせむと、此野の原の野守とはなれるべらし。

元祿二年彌生

芭蕉桃青

荒野集目錄

卷之一	花 郭公 月 雪	雜
卷之二	歲旦 初春 仲春 暮春	卷之七
卷之三	初夏 仲夏 暮夏	名所 旅 述懷 戀 無常
卷之四	初秋 仲秋 暮秋	卷之八
卷之五	初冬 仲冬 歲暮	釋教 神祇 祝
卷之六		員外

曠野集 卷之一

花 三十句

よしのにて

○これはくくとばかり花の芳野山  
 我まゝをいはする花のあるじ哉  
 薄曇りけだかくはなの林かな  
 はなのやまどことらまへて哥よまむ  
 暮 淋 し 花 の 後 の 鬼 瓦  
 山里に喰ものし(強ひ)ゐる花見かな  
 何事ぞ花みる人の長刀  
 みねの雲すこしは花もまじるべし

○これはくくと未琢撰の一  
 本草(寛文九年刊)に出  
 づ。

○みねの雲―大鏡に、堀川  
 百首「色まがふ誠の雲や  
 まじるらむころは櫻の四  
 方の山の端」を引けり。

曠野集 卷之一

四一

貞室 路通 信德 晨風 友五 尙白 去來 野水

○下々の下の山崎の宗鑑  
 その庵に「上の客人立か  
 へり中の客人日がへりと  
 まる客人下の下」と書せ  
 る額を掲げおきたりと。  
 ○いろはふけり伊呂波  
 の手習ひを習ひ終へたり  
 との意。

○おうしー多し。

はなのなか下戸引て来るかいな哉  
 下々の下の客といはれん花の宿  
 はなの山常折くぶる枝もなし  
 見あげしがふもとに成ぬ花の瀧  
 兄弟のいろはあげり花のとき  
 ちるはなは酒ぬす人よ  
 冷汁に散てもよしや花の陰  
 はつ花に誰が傘ぞいままし  
 柴舟の花咲にけり宵の雨  
 おるときになりて逃けり花の枝  
 連だつや従弟はおうし花の時  
 疱瘡の跡まだ見ゆるはな見哉  
 あらけなや風車賣花のとき

龜洞  
 越人  
 一井  
 俊似  
 鼠彈  
 舟泉  
 胡及  
 長虹  
 津島ト  
 岐早鷗  
 荷兮  
 傘下  
 薄芝

○なりあひー成行に任ずること。

○こけらー柿。板屋を聳くに用ひる薄き板。

○櫃の木のー何丸が櫃木堂  
 主人に對する挨拶の句と  
 せるは誤れり。洛外鳴瀧  
 なる三井秋風を訪へる折  
 の吟なること甲子吟行等  
 によりて明かなり。  
 ○二十句ー實は十九句にし  
 て一句脱漏せしなるべし。

花にきてうつくしく成心哉  
 山あひのはなを夕日に見出したり  
 おもしろや理窟はなしに花の雲  
 なりあひやはつ花よりの物わすれ  
 獨來て友選びけり花のやま  
 花鳥とこけら葺ゐる尾上かな  
 首出して岡の花見よ虵とり  
 酒のみ居たる人の繪に

たつ  
 心苗  
 越人  
 野水  
 冬松  
 冬文  
 荷兮  
 芭蕉

月花もなくて酒のむひとり哉  
 ある人の山家にいたりて  
 櫃の木のはなにかまはぬすがた哉  
 同

杜宇二十句

○目には一言水撰の江戸新道(延寶六年刊)に出で「鎌倉にて」と前書あり。

○晴れちぎる―十分に晴れたる。

○夜舟―伏見、大阪間を航する淀川の乗合舟。

○力がましき―りきみすぎのさま。小弓集(元祿十二年)おぼる月力がましや男子衆 尹口  
○たい有明の―後徳大寺左大臣の歌。百人一首歌加留多に出づ。

ほととぎすを飼(お)をくものに求得て放やるときに

鳥籠の	愛目見	つらん	郭公	季吟
目には	青葉山	ほととぎす	初がつほ	素堂
いそが	しきな	かに聞	けり蜀魄	釣雪
蠟燭の	ひかり	にくし	やほととぎす	越人
おひし	子の口	まね	するや時鳥	津島松
跡や先	氣のつく	野邊の	郭公	重五
ほととぎ	すどれ	から	さかむ野の廣	柳風
ある人のもとにて發句せよと有ければ				
ほととぎ	すは	かり	もなき鳥	鼠彈
晴ちぎ	る空	鳴行	やほととぎす	落梧
蚊屋	臭き	寐覺	うつゝや時鳥	一髮
三聲	ほど	跡の	おかしや郭公	同

淀にて

ほととぎ	す十日	もはや	き夜舟哉	風泉
嬉しさ	や寐入	らぬ先	のほととぎす	岐阜杏
あぶな	しや今	起て	聞郭公	傘下
くらが	りや力	がまし	きほととぎす	同
馬と馬	よばり	あひ	けり時鳥	鈍可
たゞありあけの月ぞのこれると吟じられしに				
哥が	るたに	くき人	かなほととぎす	大津智
うつ	かり	とう	つぶさ	わたり時鳥
う	つかり	と春	の心	ぞほととぎす
市	李	桃	山	月

月三十句

かるく―と笹のうへゆく月夜哉 十二歳梅 舌

○ばひとりがち—奪取り  
勝。

○屋わたり—家移り。

○いかい—いかに勝しの音便。「  
かい事」は十分の意。

○年に十二は—續古今集の  
「月毎に見る月なれどこ  
の月の今宵の月に似る月  
ぞなき」、紀納言の詩句  
「十二廻中無勝於此夕之  
好」などと同工。

それがしも月見る中の獨かな 湍水  
 月ひとつばひとりがちの今宵哉 一雪  
 雨の月どこともなしの薄あかり 越人  
 けうとさにすこ少脇むく月夜哉 昌碧  
 屋わたりの宵はさびしや月の影 津島市柳  
 おかしげにほめて詠る月夜哉 一髮  
 どこまでも見とをす月の野中哉 長虹  
 峠迄硯抱かかて月見かな 任他  
 一つ屋やいかいこと見るけふのつき 龜洞  
 名月は夜明るきはもなかりけり 越人  
 名月やとしに十二は有ながら 文鱗  
 名月やかいいつきたてつなぐ舟 昌碧  
 めいげつやはだしでありく草の中 傘下

名月や鼓の聲と夫のこゑ 二水  
 見るものと覺えて人の月見哉 野水

名月の心いそぎに

むつかしと月を見る日は火も焼かじ 荷兮  
 いつの月もあとを忘れて哀也 同來  
 名月や海もおもはず山も見ず 去來  
 めいげつや下戸と下戸とのむつまじき 胡及  
 めいげつはありきもたらぬ林かな 釣雪  
 宵に見し橋はさびしや月の影 一髮

十三夜

影ふた夜たらぬ程見る月夜哉 杉風

朔日

暮いかに月の氣もなし海の果 荷兮

○いつの月も—「今宵の月  
の類ひなきに過ぎ來し月  
の事をば忘れ果て詠入る  
事は哀れに淺はかなる心  
ならしと願ふにや」通  
旨。

○たしなき―少き。

見る人もたしなき月の夕かな 同

三日

何事の見たてにも似ず三かの月 芭蕉

四日

夕月夜あんどんけしてしばしみむ ト枝

五日

何日とも見さだめがたや宵の月 伊豫一泉

六日

銀川見習ふ比や月のそら 岡崎鶴聲

七日

能ほどにはなして歸る月夜哉 岐阜一髮

○何事の―笈日記(元祿八年刊)・泊船集(同十一年刊)等には「有とあるたとへにも似ず三日の月」とありて、大曾根の成就院よりの歸途、又其院にての作とせり。

○船頭殿の―謡曲自然居士「あゝ船頭殿の御顔の色こそなほつて候へいやちつともなほり候まじ」の文句による。

○いざ行かむ―花摘(元祿三年刊)等には上五「いざさらば」とあり、赤冊子によれば「いざさらば」と再案に改めし由。  
○加生―凡兆の前號。

雪二十句

大津にて

雪の日や船頭どの、顔の色 其角  
いざゆかむ雪見にころぶ所まで 芭蕉  
竹の雪落ちて夜るなく雀かな 塵交  
かさなるや雪のある山只の山 京加生  
車道雪なき冬のあした哉 加賀小春  
はつ雪を見てから顔を洗けり 越人  
はつ雪に戸明ぬ留主の菴かな 是幸  
ものかげのふらぬも雪の一つ哉 松芳  
くらき夜に物陰見たり雪の隈 二水  
雪降て馬屋にはいる雀かな 梟仙  
夜の雪おとさぬやうに枝折らん 岐阜除風

ゆきの日や川筋ばかりほそくと  
 初雪やおしにぎる手の寄麗也  
 雪の江の大舟よりは小舟かな  
 雪の朝から鮭わくる聲高し  
 雪の暮猶さやけしや鷹の聲  
 ちらくや淡雪かゝる酒強飯  
 はつ雪や先草履にて隣まで  
 はかられし雪の見所有り所  
 舟かけていくかふれども海の雪

芳野路荷桂冬芳傘鷺  
 川水通兮夕文川下汀

○淡雪―泡雪の誤。淡雪は春の季。  
 ○酒強飯―さかこはひ。酒造に用ひる強飯。

曠野集 卷之二

歳旦

○二日にも―笈の小文に「宵のとし空の名残惜しまむと酒のみ夜ふかして元日寝わすれたれば」と前書あり。  
 ○伊勢が家―古今集に出る伊勢の歌に「家を賣りてよめる、あすか川淵にもあらぬわが宿もせにかはり行くものにぞありける」。  
 ○歌か否―宗祇螺貝の不形なるを見て連歌によむべきものにあらずといへり(大鏡)。  
 ○柏―柏は伊勢北野の神供にも用ひて神々しくめで度ものなれば、初春のかざりにも用ゆべきにさはなくて昨年ふるよと也(通旨)。  
 ○元朝や―山家集に「何となく春になりぬとさく日より心にかゝる三吉野の山」。  
 ○ふたつこそ―白氏文集の「忽因時節驚年幾四十如今秋一年」の一年を二年

二日にもぬかりはせじな花の春  
 たれ人の手がらもからじ花の春  
 わか水や凡千年のつるべ繩  
 松かざり伊勢が家買人は誰  
 うたか否連歌にあらずにし肴  
 月雪のためにもしたし門の松  
 かざり木にならで年ふる柏哉  
 元朝や何となけれど遅ざくら  
 元日は明すましたるかすみ哉  
 齒固に梅の花かむにほひかな  
 ふたつ社老にはたらねとしの春  
 若水をうちかけて見よ雪の梅  
 伊勢浦や御木引休む今朝の春

芭蕉 釋古 梵  
 風鈴軒 其角 鱗  
 去來 文鱗  
 一品 路通  
 加賀一 路通  
 大垣如 行  
 岐阜落 梧  
 龜 洞  
 同

にとりなしたる作と大鏡にいへり。

○御木引—大神宮御造營の用材を引くこと。

○小柑子—セウコウジ。伊勢物語に石の上にはしりかゝる水はせうかうじ果の大ききにてこぼれおつとあるによると(大鏡・通旨)。

○木どり—西馬は「琵琶に月形あるより云か」といへり。木どりは木をその形に造り成すこと。

○はみちる—食み散る。

○ふかいの面—能の面にて舟舟百萬龍田源氏供養等に用ふ。

○舟の宮—嵯峨有栖川にあり。齋宮深齋のために籠る宮。

○大服—元日の點茶をいふ。

○どうぶくら—朋勝。中心、最中、眞盛り等の意。春は曙とさへいふ位なれば、曙は春の初にして且つ最も盛りともいふべき時なり。

○賢魚—堅魚を誤れるなるべし。

ことぶきの名をつけて見む宿の梅  
 去年の春ちいさかりしが芋頭  
 小柑子栗やひろはむまつのかど  
 とし男千秋樂をならひけり  
 山柴にうら白まじる竈かな  
 松高し引馬つるゝ年おとこ  
 月花の初は琵琶の木どり哉  
 連てきて子にまはせけり萬歳樂  
 うら白もはみちる神の馬屋哉  
 見おぼえむこや新玉の年の海  
 今朝と起て繩ぶしほどく柳哉  
 さほ姫やふかいの面いかならむ  
 蓬菜や舟の匠のかんなくす  
 昌碧 元廣 舟泉 同重五 釣雲 同釣 一井 胡及 長虹 鼠彈 同鼠 湍水

佛より神ぞたうとき今朝の春  
 の宮やとしの且はいかならん  
 かざりにとたが思ひだすたはら物  
 正月の魚のかしらや炭だはら  
 けさの春寂しからざる閑かな  
 あいくに松なき門もおもしろや  
 大服は去年の青葉の匂哉  
 鶯の聲聞まいれ年おとこ  
 傘に齒朶かゝりけりえ方だな  
 袖すりて松の葉契る今朝の春  
 たてゝ見む霞やうつる大かゞみ  
 曙は春の初やだうぶくら  
 はつ春のめでたき名なり賢魚々  
 京と 朴什 冬文 傘下 冬松 柳風 防川 夕道 梅舌 野水 同野 越人



○夢厚し―田舎にて鎮守參詣に捧げし麥ならん(標註)

○巳の年―元祿二年即ち曠野集撰集の年なり。

○我等しき―我等くらゐの。

初夢や濱名の橋の今のさま 同  
 しづやしづ御階にけふの麥厚し 荷 兮  
 萬歳のやどを隣に明にけり 同  
 巳のとしやむかしの春のおぼつかな 同  
 我は春目かどに立るまつ毛哉 僧般 齋  
 我等式が宿にも來るや今朝の春 貞 室

初 春

○磯菜―磯邊の若菜。

若菜つむ跡は木を割畑哉 越 人  
 精出して摘とも見えぬ若菜哉 野 水  
 七草をたゝきたがりて泣子かな 津島俊 似  
 女出て鶴たつあとの若菜哉 加賀小 春  
 側濡て袂のおもき磯菜かな 藤 羅

○石釣て―石を持ち運びて。

○鷹すゑて―拾遺集に「家づとにあまたの花も折るべきにねたくも鷹をすゑてける哉」。

○すはい―すはえ。細き枝をいふ。

○網代民部―伊勢山田の人、足代弘氏。神風館一世と號す。天和三年歿四十四歳。その息は雪堂といへり。

網代民部の息に逢て

吾うらも残してをかぬ若菜哉 岐阜素 秋  
 石釣てつぼみたる梅折しけり 立 察  
 鷹居て折にもどかし梅の花 鷗 歩  
 むめの花もの氣にいらぬけしき哉 越 人  
 藪見しれもどりに折らん梅の花 落 梧  
 梅折てあたり見廻す野中かな 一 髮  
 華もなきむめのすはいぞ頼もしき 冬 松  
 みのむしとしれつる梅のさかり哉 蕉 笠  
 梅の木になをやどり木や梅の花 芭 蕉  
 うぐひすの鳴そこなへる嵐かな 長良若 風  
 鶯の鳴や餌ひろふ片手にも 去 來  
 あけぼのや鶯とまるはね釣瓶 伊賀一 桐

鶯にちいさき藪も捨られじ津島一笑  
 うぐひすの聲に脱たる頭巾哉同市柳  
 鶯になじみもなきや新屋敷同夢々  
 うぐひすに水汲こぼすあした哉梅舌  
 さとかすむ夕をまつ盛かな野水  
 行くて程のかはらぬ霞哉塵交  
 行人の蓑をはなれぬ霞かな冬文  
 かれ芝やまだかげろふの一二寸芭蕉  
 かげろふや馬の眼のとろくと傘下  
 水仙の見る間を春に得たりけり路通  
 蝶鳥を待るけしきやものゝ枝荷兮

當座題

さし木

○枯芝や一笈の小文には中  
 七「やゝかげろふの」と  
 あり。

つきたかといのぬき見るさし木哉 舟泉

接木

つまの下かくしかねたる繼穂かな 傘下

椿

曉の釣瓶にあがるつばきかな 荷今

同

藪深く蝶氣のつかぬつばき哉 ト枝

春雨

はる雨はいせの望一がこより哉 湍水

同

春の雨弟どもを呼でこよ 鼠彈

白尾鷹

はやぶさの尻つまげたる白尾哉 野水

○つまの下一軒の端をいふ  
 (標註)。

○望一山田の人、杉木氏。  
 盲人にして俳諧をよく  
 す、句を作る毎に紙捻に  
 書かせ、竹筒に入れ置き  
 しといふ。

○白尾鷹一繼尾の鷹なり。

○すご／＼と一標註に「翁曰、相似たる句は集に出す時わざと一所に置侍れと也」といへり。

○蘭亭の主人一王羲之をいふ。鵝を愛して書にかへし故事あり。

蜘蛛の井(い)に春雨かゝる雫かな  
 立白(た)に若草見たる明屋哉十一歳龜  
 すご／＼と親子摘けりつく／＼し  
 すご／＼と摘つむやつまずや土筆  
 すご／＼と案山子のけけり土筆  
 土橋やよこにはへたるつく／＼し  
 川舟や手をのべてつむ土筆  
 つく／＼し頭巾にたまるひとつより  
 蘭亭の主人池に鵝を愛せられしは筆意有故也  
 池に鵝なし假名書習ふ柳陰  
 風の吹方(か)を後のやなぎ哉  
 何事もなしと過行(ゆ)柳哉  
 さし柳たゞ直(す)なるもおもしろし  
 奇生 舟泉 其角 蕉笠 鹽車 冬文 青江 素堂 野水 越人 一笑

○わがなり一柳自體のそのまゝの姿。  
 ○いそがしき一晋書列傳に「稽康字叔夜譙國鉅人也性絶巧而好鍛宅中有二一柳樹一甚茂乃激水圍之每夏月一居其上以鍛東平呂安服康高致」。  
 ○いそがしき一野鍛冶をしらぬ柳哉  
 ○いそがしき一野鍛冶をしらぬ柳哉  
 ○いそがしき一野鍛冶をしらぬ柳哉

尺ばかりはやたはみぬる柳哉  
 すがれ／＼柳は風にとりつかむ  
 とりつきて筏をとむる柳哉  
 さはれども髪(かみ)のゆがまぬ柳哉  
 みじかくて垣(かき)にのがる柳哉  
 ふくかぜに牛のわきむく柳哉  
 吹風に鷹かたよするやなぎ哉  
 かぜふかぬ日はわがなりの柳哉  
 いそがしき野鍛冶をしらぬ柳哉  
 蝙蝠(ふ)にみだるゝ月の柳哉  
 青柳にもたれて通す車哉  
 引(ひ)いきに後へころぶ柳かな  
 菊の名は忘れられたれども植(う)にけり  
 小春 一笑 昌碧 杏雨 此橋 杏雨 松芳 校遊 荷兮 同兮 素秋 鷗步 生林

仲春

麥の葉に菜のはなかしる嵐哉  
 菜の花や杉菜の土手のあいくに  
 なの花の座敷にうつる日影哉  
 菜の花の畦うち残すながめ哉  
 うごくとも見えで畑うつ麓かな  
 萬歳を仕舞ふてうてる春田哉  
 つばきまで折そへらるさくらかな  
 廣庭に一本植しさくら哉  
 とさくは蓑干さくら咲にけり  
 手のとくほどはおらる櫻哉  
 うしろより見られぬ岨の櫻哉  
 不長傘清去昌越笑除一野一  
 悔虹下澗來碧人艸風橋松  
 冬一除笑越昌去清傘長不  
 松橋風艸人碧來澗下虹悔

○動くとも―其袋(元祿三年刊)には下五「男かな」とあり。

○あふのき―仰向。

○手をついて―古今集の序「花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけば云々」による作意。

○木圖とひて―原本「不圖と飛て」とあり。閣は書き誤りなるべし。

○唐網―和漢三才圖會に「唐網(たうあみ)、宇知阿美、今云唐網、江湖池川多用之。今云ふとあみ也。」

すごくと山やくれけむ遅さくら  
 はる風にちからくらぶる雲雀哉  
 あふのきに寝てみむ野邊の雲雀哉  
 高聲につらをあかむる雉子かな  
 行かゝり輪繩解てやる雉子哉  
 手をついて哥申あぐる蛙かな  
 鳴立ていりあひ聞ぬかはづかな  
 あかつきをむつかしさうに鳴蛙  
 いくすべり骨おる岸のかはづ哉  
 飛入てしばし水ゆく蛙かな  
 不圖とびて後に居なをる蛙哉  
 ゆふやみの唐網にいる蛙かな  
 はつ蝶を兒の見出す笑ひ哉  
 柳井風  
 山崎宗鑑  
 津島松下一  
 落梧人  
 越來  
 去橋  
 落橋  
 一井  
 除風  
 一雪車  
 野水  
 一髮

櫻欄の葉にとまらで過る胡蝶哉  
 かやはらの中を出かぬるこてふかな  
 梅 炊 玉 餌  
 百 歳 行 胡 蝶

暮 春

何の氣もつかぬに土手の堇哉  
 ねぶたしと馬には乗らぬ堇草  
 忠 知  
 荷 今  
 野 水  
 舟 泉  
 鳥 歩  
 燭 遊  
 杜 國  
 之 之  
 大坂式  
 塘かな  
 麥畑の人見るはるの塘かな  
 行蝶のとまり残さぬあざみ哉  
 草刈て堇選出す童かな  
 畫ばかり日のさす洞の堇哉  
 ほうろくの土とる跡は堇かな  
 ほろくのと山吹ちるか瀧の音  
 芭 蕉  
 野 水  
 ト 枝  
 蓑 雪  
 同 雨  
 去 來  
 俊 似  
 長 之  
 長 虹  
 鼠 彈  
 且 藁  
 蕉 笠  
 越 人  
 角 落 て や す く も 見 ゆ る 小 鹿 哉  
 友 減 て 鳴 音 かい な や 夜 の 鴈  
 黄 昏 に た て だ さ れ た る 燕 哉  
 燕 の 巢 を 覗 行 す め かな  
 い ま き た と い は ぬ ば か り の 燕 かな  
 去 年 の 巢 の 土 ぬ り 直 す 燕 かな  
 あ そ ぶ と も ゆ く と も し ら ぬ 燕 かな  
 と り つ き て や ま ぶ き の ぞ く い は ね 哉  
 一 重 か と 山 吹 の ぞ く ゆ べ かな  
 山 吹 と て ふ の ま ぎ れ ぬ あ ら し 哉  
 松 明 に や ま 吹 う す し 夜 の い ろ  
 ほ ろ く と 山 吹 ち る か 瀧 の 音

○とまり残さぬ一つく  
止り行くなり。

○ほろくと山吹の小文に  
出づ。大和國西河にての  
吟なり。

○たて出され一閉め出さ  
れ。

なら漬に親よぶ浦の鹽干哉  
 越 人  
 角 落 て や す く も 見 ゆ る 小 鹿 哉  
 蕉 笠  
 友 減 て 鳴 音 かい な や 夜 の 鴈  
 且 藁  
 黄 昏 に た て だ さ れ た る 燕 哉  
 鼠 彈  
 燕 の 巢 を 覗 行 す め かな  
 長 虹  
 い ま き た と い は ぬ ば か り の 燕 かな  
 長 之  
 去 年 の 巢 の 土 ぬ り 直 す 燕 かな  
 俊 似  
 あ そ ぶ と も ゆ く と も し ら ぬ 燕 かな  
 去 來  
 と り つ き て や ま ぶ き の ぞ く い は ね 哉  
 同 雨  
 一 重 か と 山 吹 の ぞ く ゆ べ かな  
 蓑 雪  
 山 吹 と て ふ の ま ぎ れ ぬ あ ら し 哉  
 ト 枝  
 松 明 に や ま 吹 う す し 夜 の い ろ  
 野 水  
 ほ ろ く と 山 吹 ち る か 瀧 の 音  
 芭 蕉

○山まゆー山蔵なり。

○あみ鹽からーあみざこ  
(小蝦)の鹽辛なり。

あやも子も同じ飲手や桃の酒 傘 下  
 人霞む舟と陸との鹽干かな 三輪友 重  
 山まゆに花咲かぬる躑躅かな 荷 兮  
 臘夜やながくてしろき藤の花 兼 正  
 篝火に藤のすゝけぬ鶉舟かな 龜 洞  
 永き日や鐘突跡もくれぬ也 ト 枝  
 永き日や油しめ木のよはる音 野 水  
 行春のあみ鹽からを残りけり 同

曠野集 卷之三

初夏

ころもがへや白きは物に手のつかず 路 通

○だぐくさー亂雑なるさま。

○文鱗ー芭蕉門。江戸住、堺の人なり。

○髭にたくー牡丹花宵柏は宗祇の門人にして且つ香を愛したれば、かの名高き宗祇の髭に焚きこめし香もあらんとなり。

○なつ來てもー泊船集に「あら野には一葉を一ツかなとあやまりぬ」と附記せり。

○いたり過ぎたるー柿の若葉は特に光澤つややかなれば、人の粹なるに喩へしならん。いたるとは心の行届きて粹なるをいふ。

更衣襟もおらずやだぐくさに 傘 下  
 ころもがへ刀もさして見たき哉 釋鼠 彈

宵柏老人のもちたまひしあらし山といふ香を、馬のはなむけに文鱗がくれけるとて、雪の朝越人が持きたるを忘れがたく、明るわか葉の比文鱗に申つかはしける

髭に焼香もあるべしころもがへ 荷 兮

山路にて

なつ來てもたゞひとつ葉の一つ哉 芭 蕉  
 いちはつはおとこなるらんかきつばた 一 井  
 柿の木のいたり過たる若葉哉 越 人  
 切かぶのわか葉を見れば櫻哉 岐阜不 交  
 若葉からすぐにながめの冬木哉 同 藤 蘿  
 わけもなくその木くの若葉哉 龜 洞

ひらくとわか葉にとまる故蝶哉  
 ゆあびして若葉見に行夕かな  
 はげ山や下行水の澤卯木  
 上ゲ土にいつの種とて麥一穂  
 枯色は麥ばかり見る夏の哉  
 麥かりて桑の木ばかり残りけり  
 むぎがらにしかるゝ里の葵かな  
 しら芥子にはかなや蝶の鼠いろ  
 鳥飛であぶなきけしの一重哉  
 けし散て直に實を見る夕哉  
 大粒な雨にこたえし芥子の花  
 散たびに見ぞ拾ひぬ芥子の花

竹洞  
 鈍可  
 夢々  
 玄寮  
 生林  
 作者不知  
 鈍可  
 嵐蘭  
 落梧  
 岐阜李桃  
 東巡  
 吉次

○玄寮—玄寮の誤。

○こたへし—雨に耐へて散らざる意。

○深川の庵—芭蕉庵なり。

深川の庵にて

菴の夜もみじかくなりぬすこしづゝ  
 さびしさの色はおぼえずかつこ鳥  
 嵐雪  
 野水

仲夏

宵の間は笹にみだるゝ螢かな  
 刈草の馬屋に光るほたるかな  
 窓くらき障子をのぼる螢哉  
 聞きよりくらき人呼螢かな  
 道細く追はれぬ澤の螢かな  
 あめの夜は下ばかり行螢かな  
 くさかりの袖より出るほたる哉  
 水汲て濡たる袖のほたるかな  
 櫻井元輔  
 一髪  
 不交  
 風笛  
 青江  
 舍咕  
 卜枝  
 鷗歩

○葎室—茅屋といふに同じ。

○元輔—基佐。宗祇時代の連歌師、新撰筑波集にその連歌の入らざりし諷刺の歌を以て名高し。なほこの句「菊の庵」(寶永年間刊)には上五「酔ひもせで」とあり。  
 ○聞きより—拾遺集、和泉式部の歌に「くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」。

はじめて葎室をとぶらはれける比

○かづける―被れる。

○しるし―明かにそれと知らる。

○柳きはまる―柳の枝の垂れしが汀の水面にとどく意。

こゝらかとのぞくあやめの軒端哉 秋  
 蚊のむれて梅の一木の曇けり 小  
 かやり火に寐所せまくなりけり 杏  
 雨のくれ傘のぐるりに鳴蚊かな 二  
 蚊の瘦て鎧のうへにとまりけり 一  
 藻の花をかづける蟹の鬢かな 胡  
 鹽引て藻の花しほむ著さかな 兒  
 足伸べて姫百合艸あらず晝ね哉 此  
 竹の子に行燈さげてまはりけり 長  
 笋の時よりしるし弓の竹 去  
 聞おればたしくでもなき水鶏哉 野  
 五月雨に柳きはまる汀かな 大津一  
 この比は小粒になりぬ五月雨 尚  
 白

五月雨は傘に音なきを雨間哉 龜洞

岐阜にて

おもしろうさうしさばくる鶺鴒哉 貞室

おなじ所にて

おもしろうてやがてかなしき鶺鴒舟哉 芭蕉

おなじく

鶺鴒のつらに箒こぼれて憐也 荷兮

同

聲あらば鮎も鳴らん鶺鴒飼舟 越人

先ふねの親もかまはぬ鶺鴒舟哉 大津淳 兒

曲江に箒の見えぬうぶねかな 梅 餌

鴨の巢の見えたりあるはかくれたり 路 通

松笠の緑を見たる夏野哉 卜 枝

○さうしさばくる―この句玉海集追加(寛文七年刊)に「濃州長良河にて十二艘の舟ごとをのく二羽づゝつがひ侍るをみて、おもしろうさうしさばくるう細かな 貞室」と出づ。數條の鶺鴒を巧に操るさまをいへり。

○おもしろうて―笈日記に「鶺鴒も通り過る程に歸ると」と前書有り。菊の香(元祿十年刊)に「此句晋子が所持の翁の自筆には」とありて中七を「やがてなかる」とせり。「泣かる」とか。



○撫子や―枕草子に「書き  
おとりするもの撫子さく  
ら山吹」。

○すびつさへ―枕草子すさ  
まじきものの條に火起さ  
ぬ火桶炭櫃をかぞへ、又  
長明の無名抄に「火起さ  
ぬ夏の炭びつ心のちして  
人もすさめすさまじの  
身や」の歌あり。

○夕顔や秋はいろくくの―  
此句干鳥掛には「初秋中  
一此處に遊て此處は尾  
の鳴海」と詞書ありて初  
秋の吟なり。その他諸集  
すべて秋の部に出せり。  
なほ此句古今集「みどり  
なるひとつ草とぞ春は見  
し秋は色くくの花にぞあ  
りける」を踏めるならむ。

虹の根をかくす野中の樗哉  
蘭の花や泥によごるゝ宵の雨  
撫子や蒔繪書人をうらむらん  
冷じや灯のこる夏のあさ  
夏の夜やたき火に籠見ゆる里

菴の留主に

すびつさへすごきに夏の炭俵  
夕がほや秋はいろくくの瓢かな  
ゆふがほのしほむは人のしらぬ也  
夕良は蚊の鳴ほどのくらす哉  
山路来て夕がほみたるのなか哉  
名はへちまゆふがほに似て哀也

鈍可  
同  
越人  
藤羅  
且藁

其角  
芭蕉  
野水  
借雪  
津島市柳  
長虹

暮夏

○たくむ―工夫す。

○榎もやらぬ―「え退きも  
やらぬ」の秀句。玄旨は  
細川幽齋なり。

○おもはずの人―思ひかけ  
ぬ人。

楠も動くやう也蟬の聲  
雲の峰腰かけ所たくむなり  
夕立に干傘ぬるゝ垣穂かな  
すゞしさに榎もやらぬ木陰哉  
涼しさよ白雨ながら入日影  
籠して涼しや宿のはいりぐち  
はき庭の砂あつからぬ曇哉  
おもはずの人に逢けり夕涼み  
飛石の石龍や草の下涼み  
涼しさや樓の下ゆく水の音  
挑燈のどこやらゆかし涼み舟  
すゞしさをわすれてもどる川邊哉

昌碧  
野水  
傘下  
玄旨法師  
去來  
荷兮  
同  
鳴海如風  
津島俊似  
同  
ト枝  
未學

○蓮みむ日に「蓮見む。日に」とよむべし。

吹ちりて水のうへゆく蓮かな岐早秀正  
 蓮みむ日にさかやきはわるゝとも松坂晨風  
 笠を着てみなく蓮に暮にけり古梵  
 河骨に水のわれ行ながれ哉芙水  
 はらくとしみづに松の古葉哉長虹  
 すみきりて鹽干の沖の清水哉俊似  
 連あまた待せて結ぶし水哉文瀾  
 引立て馬にのまするし水かな潦月  
 かたびらは淺黄着て行清水哉尙白  
 直垂をぬがずに結ぶしみづかな一髮  
 虫ほしや幕をふるえばさくら花ト枝  
 麻の露皆こぼれけり馬の路岐早李晨  
 釣鐘草後に付たる名なるべし越人

○釣鐘草―奥の細道に「かさねとは八雲撫子の名なるべし。曾良」とあると同調。

綿の花たま〜蘭に似たるかな素堂

### 曠野集 卷之四

#### 初秋

ちからなや麻刈あとの秋の風越人  
 梧の葉やひとつかぶらん秋の風圓解

松島雲居の寺にて

一葉散音かしましきさばかり也仙化  
 かたびらのちむむや秋の夕げしき津島方生  
 男くさき羽織を星の手向哉杏雨  
 朝貞は酒盛しらぬさかりかな芭蕉  
 葬や垣ほのまゝのじだらくさ文鱗

○雲居の寺―雲居禪師の開きし瑞巖寺。

○一葉散る―大辭天下の秋を知らしむるの情。

○朝貞は―支考の笈日記(元祿八年刊)に「人々、郊外に送り出て三盃を傾侍るに」と前書あり。

あさがほの白きは露も見へぬ也 荷 兮

子を守るものにいひし詞の句になりて

朝顔をその子にやるなくらふもの 同 鷗 歩

隣なるあさがほ竹にうつしけり 胡 及

あさがほやひくみの水に残る月 鼠 彈

葉より葉にもものいふやうや露の音 去 來

秋風やしらきの弓に弦はらん 昌 長

涼しさは座敷より釣鱸かな 鶯 汀

畦道に乗物すゆるいなばかな 一 髮

まつむしは通る跡より鳴にけり 素 秋

きりくす燈臺消て鳴にけり 芭 蕉

あの雲は稻妻を待たより哉 其 角

いなづまやきのふは東けふは西

○燈臺―燭臺。

○ひよろくと―笈日記には中七「こけて露けし」に作る。

○宗祇法師の―宗祇の吾妻問答に、親當の發句として「名も知らぬ小草花さく川邊かな」とあり。

○かれ朶に―言水の「東日記」(延寶九年刊)に「枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮」と見ゆ。

ふまれてもなをうつくしや萩の花 舟 泉

ひよろくと猶露けしや女郎花 芭 蕉

棚作はじめさびしき蒲萄哉 作者不知

草ばうくからぬも荷ふ花野哉 伏見任 口

もえきれて紙燭をなぐる薄哉 荷 兮

行人や堀にはまらんむら薄 胡 及

宗祇法師のこと葉によりて

名もしらぬ小草花咲野菊哉 素 堂

としくのふる根に高き薄哉 俊 似

仲 秋

かれ朶に鳥のとまりけり秋の暮 芭 蕉  
つくくと繪を見る秋の扇哉 加賀小 春

谷川や茶袋そゝぐ秋のくれ津島益音  
 石切の音も聞きけり秋の暮傘下  
 斧のねや蝙蝠出るあきのくれト枝  
 鹿の音に人の貌みる夕ゆふ部べ哉一髪  
 田と畑を獨りにたのみ案山子哉伊豫一泉  
 山賤が鹿か驚せ作りて笑けり重五  
 紅葉にはたがをしへける酒の間かん其角  
 しらぬ人と物いひて見る紅葉哉東順  
 藪の中に紅葉みじかき立枝哉林斧  
 どことなく地にはふ蔦の哀也越水  
 わが宿はどこやら秋の草葉哉宗和  
わが草庵にたづねられし比  
 恥もせず我なり秋とおごりけり加賀北枝

○紅葉には―白樂天の林間  
 援酒徒紅葉の詩句によ  
 る。  
 ○間―此字畑に用ふること  
 古書には普通なり。

○なり秋―出来秋。

○素堂―山口素堂。葛飾郡  
 阿武に隠棲し、池に蓮を  
 植ゑて蓮池翁と稱せら  
 る。

○素牛―惟然の初號。

○孫六―關孫六兼元、志津  
 三郎兼氏、ともに名高き  
 關の刀工なり。

○きぬた―早子吟行に「あ  
 る坊に一夜をかりて」と  
 前書ありて、中七「我に  
 きかせよや」と有り。

素堂へまかりて

はすの實のぬけつくしたる蓮のみか越人  
 一本の蘆の穂瘦しぬせき哉防川  
 松の木に吹あてられな秋の蝶舟泉  
 ばつとして寐られぬ蚊屋のわかれ哉胡及  
 心にもかゝらぬ市のきぬたかな曉鬚

關の素牛にあひて

さぞ砧孫六やしき志津屋敷其角  
 よしのにて

きぬたうちて我にきかせよ坊がつま芭蕉  
 いそがしや野分の空の夜這星加賀一笑

暮 秋

○白菊の散らぬぞ一なごりなく散るぞめでたしと歌はれける櫻花に對したる情。

なばとなく植<sup>うゑ</sup>しが菊の白き哉 巴  
しら菊のちらぬぞ少<sup>すこ</sup>口<sup>くち</sup>おしき 昌碧  
山路のさく野菊とも又ちがひけり 越人  
一色や作らぬ菊のはなざかり 曉  
路 巖

荷分が室に旅ねする夜、草臥<sup>くさ</sup>なをせとて、箔<sup>はらけ</sup>つけたる土器<sup>かばらけ</sup>出され

ければ

○かはらけの酒豪ぶりを見せんとたり。

○鬢帽子一書言字考に「鬢帽子、又云鉢巻」とあり。なほ此句續猿蓑・五元集等には「朝顔にしをれし人や」とあり。  
○鹽木一鹽やく爲の柴なり。

かはらけの手ぎは見せばや菊の花 其角  
菊のつゆ<sup>しつゆ</sup>凋<sup>しぼ</sup>る人や鬢<sup>びん</sup>帽子 同  
けふになりて菊作<sup>つくら</sup>ふとおもひけり 二水  
かなぐりて蔦さへ霜の鹽木哉 伊豫千  
淋しさは榎の實落るね覺哉 濃州蘆 閣  
残る葉ものこらずちれや梅もどき 加生  
蘆の穂やまねく哀れよりちるあはれ 路通

曠野集 卷之五

初冬

○あめつちの此句もと「風聲は天地の語なりとある」と前書あり。

○一夜来て一語曲三井寺の中に「わらはをいつもとひ慰むる人の候。あはれ來り候へかし、語らばやと思ひ候」といふ文句あり。

あめつちのはなしとだゆる時雨哉 湖春  
京なる人に申遣しける

一夜きて三井寺うたへ初しぐれ 尙白  
はつしぐれ何おもひ出すこの夕 湍水  
萬句興行に

見しり逢ふ人のやどりの時雨哉 荷兮  
人を待うくる日に

今朝は猶そらばかり見るしぐれ哉 落梧  
釣がねの下降<sup>くだり</sup>のこすしぐれかな 炊玉

○こがらしに―この句によ  
り荷分は「思の荷分」と  
名を得たりと（元峯撰、  
桃の賞）。

○みなになり―すて散り  
盡したりとなり。

○梨の花―歸り花なり。

渡し守ばかり蓑着るしぐれ哉 傘下  
 こがらしに二日の月のふきちるか 荷兮  
 一葉づゝ柿の葉みなに成なりにけり 一髪  
 このはたく跡は淋しき圍爐裏哉 同  
 枇杷の花人のわするゝ木陰かな 同  
 茶の花はものゝつ（花）わでに見たる哉 李晨  
 梨の花しぐれにぬれて猶淋し 野水  
 蓑虫のいつから見るや歸花 昌碧  
 麥まきて奇麗なりに成し庵哉 同 井  
 のどけしや麥まく比の衣がへ 一 井  
 縫ものをたゝみてあたる火燧哉 落 梧  
 石臼の破（お）ておかしやつはの花 胡 及  
 青くともとく（未）さは冬（賦）の見物哉 文 鱗

○葱―葱（シノブ）は夏季な  
れば、標註には葱の書損  
じならんといへり。ねぶ  
かと讀むか。又通旨には  
井の中に生えし冬枯の葱  
也。句柄によりて冬季に  
入るゝなるべしと。

○鷹（鷹）の巾―紙にて製し鷹の  
頭を包むもの。鳥さへ見  
ればはやるが故に巾を冠  
らせてするなり。

あたらしき釣瓶にかゝる葱かな ト 枝  
 冬枯に風の休みもなき野哉 洞 雪  
 蓮池のかたちは見ゆる枯葉哉 一 髪  
 鷹居（ま）て石けつまづくかれ野哉 松 芳  
 こがらしに吹とられけり鷹の巾 杏 雨  
 鷹狩の路にひきたる燕哉 蕉 笠  
 寒 月 蕉 笠  
 爐を出て度く月ぞ面白き 野 水  
 あさ漬の大根（洗）あるふ月夜哉 俊 似

仲冬

しろし（雪）をく鐘しづかなる霞哉 津島勝 吉  
 しら浪とつれてたばしる霞哉 津島重 治

○せんだん―糶(アフチ)なり。

搔よする馬糞にまじるあられ哉  
柴の戸をほどく間にやむ霰哉  
いたゞける柴をおろせば霰かな  
霜の朝せんだんの實のこぼれけり  
水棚の菜の葉に見たる氷かな  
深き池氷のときに覗きけり  
つきはりてまつ葉かきけり薄氷  
打(お)おりて何ぞにしたき氷柱哉

林 斧  
杏 雨  
宗 之  
杜 國  
勝 吉  
俊 似  
除 風  
夜 舟

兼題雪舟

○鹽木―鹽竈に焚く薪。峠まで雪舟にてその薪をとりに行ける景。

峠より雪舟乗(も)をろす鹽木哉  
ぬつくりと雪舟に乗たるにくさ哉  
夜をこめて雪舟に乗たるよめり(こ)哉  
馬屋より雪舟引出す朝かな

鼠 彈  
荷 兮  
長 虹  
一 井

○はや緒―楳につけて引く綱。

○忠知―神野氏「白炭や焼かぬ昔の雪の枝」の句名高く、白炭の忠知と稱せらる。

雪舟引や休むも直に立てゐる  
つけかへておくる、雪舟のはや緒哉  
青海や羽白黒鴨赤がしら  
舟にたく火に聲たつる衝哉  
朝鮮を見たもあるらん友千鳥

井を掘る者は六月寒く、米つくおと(男)こは冬裸かなり

龜 洞  
舍 咕  
忠 知  
龜 洞  
村 俊

○火とぼして―花の咲き初むるを「火をともし」といふ。

○冬籠り―白樂天の間居賦に「間居而復倚此柱」。

汗出して谷に突こむ氷室哉  
海鼠腸(わた)の壺埋めたき氷室哉  
炭竈の穴ふさぐやら薄けぶり  
膝節をつゝめど出るさむさ哉  
火とぼして幾日になりぬ冬椿  
いつこけし(ひさ)庇起せば冬つばき  
冬籠りまたよりそはん此はしら

冬 松  
利 重  
龜 洞  
鹽 車  
一 笑  
龜 洞  
芭 蕉

歳暮

餅つきや内にも(居)あらず酒くらひ  
 吾書てよめぬもの有り年の暮  
 もち花の後はすゝけてちりぬべし  
 はる近くた櫛つみかゆる菜畑哉  
 煤はらひ梅にさげたる瓢かな  
 李 下  
 尚 白  
 野 水  
 龜 洞  
 一 髮

○木曾の月—元祿元年芭蕉

越人と共に更科に遊び  
 「木曾の枌存世の人のみ  
 やげ哉」の吟あり。この  
 時枌の實を荷兮に贈りし  
 ならん。

木曾の月みてくる人の、みやげにとて枌の實ひとつおくらる。年

の暮迄うしなはず、かざりにやせむとて

としのくれこ枌の實一つころくと  
 門松をうりて蛤一荷ひ  
 田作に鼠追ふよの寒さ哉  
 荷 兮  
 内 習  
 龜 洞

○田作—ごまめ。

曠野集 卷之六

雜

年中行事内十二句

荷 兮

供屠蘇白散

いはけなやとそなめ初る人次第

春日祭

としごととに鳥居の藤のつぼみ哉

石清水臨時祭

沓音もしづかにかざすさくら哉

灌 佛

けふの日やついでに洗ふ佛達

曠野集 卷之六

八五

○いはけなや—古へ正月元  
 日宮中にて薬子とて未婚  
 の童女に供御の屠蘇を嘗  
 め試みさす事ありき。  
 ○春日祭—二月上旬の申日。  
 ○石清水臨時祭—三月中の  
 午日。



○葵付たる―端午の日加茂  
參詣の人々皆葵をつくる  
なり。

○施米―六月京都の東山西  
山北山等の貧僧に官より  
米鹽を施すこと。

○乞巧奠―原本「乞巧費」  
とあるを改む。

○駒迎―八月中旬信濃甲斐  
武藏等より貢進する馬を  
馬寮の暫人逢坂山に迎  
ふ。後世は十六日に一定  
し、且つ諸國の駒引は絶  
えて信濃の望月のみとな  
れり。

○遣蟲―殿上人の嵯峨野な  
どに遣遙して鳴く虫を捕  
り、これを籠に入れて宮  
中に上りしをいふ。

○十月更衣―四月一日と十  
月一日に宮中にて更衣行  
はる。

○五節―十一月中の丑の日  
より卯の日に亘りて行は  
るゝ公事。

端午

おも 瘦て 葵付たる 髮薄し

施米

うち 明て ほどこす 米ぞ 虫臭き

乞巧奠

わか 菜より 七夕草ぞ 覺へよき

駒迎

爪 髪も 旅の すがたや こまむかへ

撰蟲

草の 葉や 足のおれたる きりくす

十月更衣

玉しきの 衣かへよと かへり花

五節

舞姫に 幾たび 指を 折にけり

追難

おはれて や脇には づるゝ 鬼の面

詩題十六句

野水

今日不知誰計會 春風春水一時來

氷のし 添水またなる 春の風

白片落梅浮澗水

水鳥のはしに付たる 梅白し

春來無伴閑遊少

花賣に留主たのまるゝ 隣哉

花下忘歸因美景

寐入なばもの 引きせよ 花の下

曠野集 卷之六

八七

○追難―つゝひな。十二月晦  
日朝廷に於て疫鬼を拂ふ  
ために行はるゝ儀式。

○詩題―十六句ともみな白  
樂天の詩句なり。

○添水―山田などにて猪鹿  
を驚かすため、水流には  
ね釣瓶やうのものをしか  
けて、音を發せしむるも  
の。

○またなる―又鳴る。

○春不留—白氏文集には「春不住」に作る。

○巖風—文集には「微風吹袂衣」に作る。

○綿脱—綿拔。更衣に布子の綿を抜去りて捨とするをいふ(栞草)。

○處有—所有に作るべし。

○大底—大抵に作るべし。

○それらでは—中々それらの事にてはなし。雪は只寒きのみ云々(通旨)。

○風雨後—文集には「秋雨後」とあり。

○遅々—長恨歌には「遅々鐘鼓初長夜」とあり。

留春春不留 春歸人寂寞  
行春もこゝろへがほの野寺かな

巖風吹袂衣 不寒復不熱

綿脱は松かぜ聞に行ころか

池晚蓮芳謝

蓮の香も行水したる氣色哉

暑月貧家何處有 客來唯贈北窓風

涼めとて切ぬきにけり北のまど

大底四時心惣苦 就中斷腸是秋天

雪の旅それらではなし秋の空

夜來風雨後 秋氣颯然新

秋の雨はれて瓜よぶ人もなし

遅々鐘漏初夜長 耿々星河欲曙天

ひとしきりひだるうなりて夜ぞ長き

殘影燈閑牆 斜月光穿牖

獨り寐や泣たる貞にまどの月

萬物秋霜能懷色

白菊や素顔で見むを秋の霜

十月江南天氣好 可憐冬景似春美

こがらしもしばし息つく小春哉

寂寞深村夜 殘雁雪中聞

鉢たゝき出もこぬむらや雪のかり

白頭夜禮佛名經

佛名の禮に腰懷く白髮哉

○禪閣—一條禪閣兼良をいへり。兼良の撰べる職人歌合の中に洩れたるをここに拾ひて題とせしなり。

禪閣の撰びのこし給ひしも、さすがにおかしくて

鋸鐮目立

かげろふの夕日にいたきつぶり哉

付木突

五月闇水鶏ではなし人の家

釣瓶繩打

かへるさや酒のみによる秋の里

糊賣

あさ露のぎぼう折<sup>をり</sup>けむつくもがみ

馬糞搔

こがらしの松の葉かきとつれ立て

李夫人

魂在何許 香煙引到焚處

越人

○付木突―付木を削るをいふ。

○ぎぼう―紫萼(ギバウシ)。糊賣婆の蓬髪にぎぼうしを折<sup>をり</sup>りてさせるをよみしなり。

○魂在云々―白氏文集卷四に「夫人之魂在何許、香煙引到焚處」云々には香一字を脱せり。

○雲髻云々―長恨歌中の句。但し下堂の下に來字を脱せり。

○昭陽人―上陽人。詩句は白氏文集卷三に出づ。

かげろふの抱つけばわがころも哉

楊貴妃

雲髻半偏新睡覺 花冠不整下堂

はる風に帯ゆるみたる寐貌哉

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳 青黛點眉々細長 外人不見々應笑

もの數寄<sup>すき</sup>やむかしの春の儘ならん

西施

宮中拾得娥眉斧 不獻吾君是愛君

花ながら植かへらるゝ牡丹かな

王照<sup>(昭)</sup>君

玉貌風沙<sup>(勝)</sup>膝畫圖

よの木にもまぎれぬ冬の柳哉

一日留主をする事侍りて

釣雪

卯

寐やの蚊や御佛がく供たぐ焼火やきに出て行ゆ

辰

杜若かき生なん繪書えいの來きる日ひ哉

巳

講釋かうの眠ねりにつかふ扇あふ哉

午

水あびよ藍あま干か上かみを踏ふずとも

未

蟬せみの音ねに武家ぶけの夕食ゆふ過すにけり

申

五月雨ごごや鶏けいとまるはね作り

○水あびよ—午天に藍を干して其氣もさかんなれば、其上をふまずとも、是にちかづく時は水あびて、長養の氣を破らざる様にあるべきとの禁戒なり(通言)。

所にありて生をたつ事是非なし。

山 猯

鹿笛かふエの上手うへを盡つくすあはれさよ

樹 水

野 鳥

鳴突なるの行影ゆかり長ながき日ひあし哉

兒 竹

里 虫

枝えだながら虫むしうりに行ゆ蜀涑せきかな

舍 咕

海 魚

おもしろと鰯いわし引ひけり盆ひらの月つき

同

川 魚

秋あきの昏くろ鶴つる川がはの火ひぶり哉

舍 咕

○火ぶり—松明の光に魚を候ひてとること。

○蜀涑—くさぎ。秋初五瓣の白花を簇生す。葉は桐に似て小く臭氣甚し。

○牛馬云々—以下三句の題詞みな莊子の語なり。

牛馬四足是謂天落馬首穿牛鼻是謂人

○藏舟云々一固の下矣字を脱し、有力を有々力と誤れり。

一方は梅さく桃の繼木かな  
藏舟於壑藏山於澤謂之固然而夜半有々力者負之而走  
からながら師走の市にうるさ（柔）い（響） 越人

絶聖棄知大盜乃止

七夕よ物かすこともなきむかし

鈍者天

散はてゝ跡なきものは花火哉 桂夕

鈍者壽

鶏頭の雪になる迄あかき紅かな 市山

藤房

ほとゝぎす鳴やむ時をしりにけり 一井

師直

うつくしく人にみらるゝ荆哉 長虹

○藤房一後醍醐天皇を諫め奉りて隠遁す。事は太平記に詳し。  
○師直一鹽治判官の妻女に心かけし事有名なり。

一休

いろくのかたち（を）おかしや月の雲 湍水

法然

鳴聲のつくろひもなきうづら哉 鼠彈

山岩

おくやまは霞に減るか岩の角 湍水

海岩

苔のとりし跡には土もなかりけり 同

曠野集 卷之七

名所

八重がすみ奥迄見たる龍田哉 杜國

○鳴聲の法然の名利の學を好まず、淨土專念の宗を唱へしをいふ。  
○苔一古く此一字にて海苔と訓ませたる例多し。

○白魚の―白魚の骨は見たる者なしといふ俚諺により、まだふみも見ぬ大江山の歌に比せしなり。

○から崎の―甲子吟行に湖水眺望と前書あり。

○阿波手―尾張國あはでの森。

○琵琶橋―名古屋より津島に至る途中にあり。

○鬼獄―美濃國。一説に御獄とも。

○藤代御坂―萬葉などに見えたる藤しろのみ坂は紀州なり。こゝは美濃國なれど藤の白きを見て宗祇が生國の歌枕を思ひ出ししなり。

○布子賣おし―笈の小文に「布子賣たし」と有り。

しら魚の骨や式部が大江山  
から崎の松は花より朧にて  
藁一把かりて花見る阿波手哉  
嵯峨までは見事あゆみぬ花盛  
荷分  
湍水  
兮

琵琶橋眺望

雪残る鬼獄さむき彌生かな  
關こえて爰も藤しろみさか哉  
宗祇法師  
含  
咕

美濃國關といふ所の山寺に、藤の咲たるを見て吟じ給ふとや

芳野出て布子賣おし更衣  
杜國  
麥うつや内外もなき志賀のさと  
重五  
五月雨にかくれぬものや瀬田の橋  
芭蕉  
湖の水まさりけり五月雨  
去來  
牛もなし鳥羽のあたりの五月雨  
一髮

隅田川にて

○いざのぼれ―宋琢の一本草に出で、「京にてむつまじかりつる友の武藏の國に」とし經て住けるが角田川見せんとさそひければまかりて」と詞書あり。

いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥  
貞室  
みよしのはいかに秋立貝の音  
破笠  
いざよひもまださらしなの郡哉  
芭蕉  
夕月や杖に水なぶる角田川  
越人

九月十三夜

○唐土に―富士は本朝の名山、後の月は寛平法皇の時に取りて我國にてのみ賞する所。

○萱津―尾張國海東郡。

唐土に富士あらばけふの月もみよ  
素堂  
鳴突の馬やり過す鳥羽田哉  
胡及  
鳴突は萱津のあまのむまご哉  
淵支  
武藏野やいく所にも見る時雨  
舟泉  
湖を屋ねから見せん村しぐれ  
尙白  
から崎やとまりあはせて初しぐれ  
伊豫隨友  
むさしのとおもへど冬の日あし哉  
洗惡

○小野—洛北大原の附近。

○星崎—尾張國、笠寺の南。  
なほ此句、笈の小文には、「鳴海にとまりて」と前書有り。

○夜の日—夜を日につぐの意か。なほ古版本に「日」を「灯」と朱にて訂正せるものあり。

○雲雀より—甲子吟行に中七「空にやすらふ」とあり。大和多武峯より龍門に越ゆる道、齋峠（今細峠）にての吟なり。

○平尾村—原本平字は草字の如く讀まるれど、平の書誤なるべし。平尾村は多武峯より吉野上市に出づる道の傍にて龍門瀧の南なり。  
○花の陰—忠度の「行きくれば木の下かげを宿とせば」の歌と同趣。

俳諧七部集

九八

めづらしと生海鼠を焼や小の、奥  
冬ざれの獨轆轤やをの、おく  
雪の富士藁屋一つにかくれけり  
よし野山も唯大雪の夕哉  
星崎のやみを見よとや鳴千鳥  
夜るの日や不破の小家の煤はらひ

俊似  
一 笑  
湍 水  
野 水  
芭 蕉  
如 行

旅

雲雀より上にやするふ峠かな  
大和國平尾村にて  
花の陰謠に似たる旅ねかな  
櫻咲里を眠りて通りけり  
日の入や舟に見て行桃の花

芭蕉  
同 楓  
夕 一  
髮

のどけしや湊の晝の生さかな  
ひとつ脱で後におひぬ衣がへ

荷 兮  
芭 蕉

ある人の餞別に

ほととぎすなみだおさへて笑けり  
寐いらぬに食焼宿ぞ明やすき  
蚊をころすうちに夜明る旅ね哉  
五月雨や柱目を出す市の家  
夕立にどの大名か一しぼり

除 風  
冬 松  
昌 碧  
松 芳  
傘 下

○芭蕉—原本芭雀とあり、今改む。

芭蕉士を送る

稻妻にはしりつきたる別かな  
なきく〜て袂にすがる秋の蟬  
あき風に申かねたるわかれ哉  
物いはじたゞさへ秋のかなしさよ

釣 雪  
一 井  
野 水  
舟 泉

曠野集 卷之七

九九

霧はれよすがたを松に見へぬ迄

鼠 彈

さらしなに行人々にむかひて

更級の月は二人に見られけり

荷 今

越人旅立けるよし聞て、京より申つかはす

月に行脇差つめよ馬のうへ

野 水

おくられつおくりつはては木曾の秋

芭 蕉 路 通

蜘蛛の巢の是も散行秋のいほ

狩野桶といふ物、其角のはなむけにおくるとて

狩野桶に鹿をなつけよ秋の山

荷 今

とまりく稻すり歌も替けり

京 ち ね

入月に今しばし行とまり哉

一 玄 寮 井

能きけば親舟に打碇かな

品川にて人にわかるよとて

○さらしなに―元禄元年八月芭蕉、越人を伴ひて更級紀行の旅に出づるにつけての餞別なり。

○狩野桶―元信末だ四郎次郎といひし頃、貧にして桶に花鳥等を書きて賣れるもの(大鏡)。狩野家の書工の曲物にてつくれる筆洗(標註)。又カリノヲケと訓み、獵師の腰につくる飼箱などいへるもの(通旨)。狩場にて食物を入るる器(よしなし草)等の説あり。他の用例より見るにカリノヲケ説に従ふべきに似たり。たゞしカリノを約めてカノヲケと訓みしか。句は旅の具にこれを贈りしならん。

○ちね―去來の妹。

○澤菴の墓―品川東海寺にあり。

澤菴の墓をわかれの秋の暮  
草枕犬もしぐるゝか夜るの聲  
旅なれぬ刀うたてや村しぐれ  
津島常秀

鳴海にて芭蕉子に逢ふて

いく落葉それほど袖もほころびず  
夢に見し羽織は綿の入にけり  
野 水

其角にわかるよとき

あゝたつたひとりたつたる冬の宿  
天龍でたゝかれたまへ雪の暮  
から尻の馬にみてゆく千鳥哉  
里人のわたり候かはしの霜  
宗 因

越人と吉田の驛にて

寒けれど二人旅ねぞたのもしき  
芭 蕉

○あゝたつた―犬子集に「あつたつたひとりたつたることし哉 貞徳」。

○天龍―西行天龍川の渡しにて船頭に頭をうたれしといふ逸話あり。

○里人の―温庭筠の詩句に「鷓鴣聲茅店月、人跡板橋霜」。宗因の此句顯成撰の境海草(萬治三年刊)に見え「宇治にて」と詞書あり。



旅寐して見しや浮世の煤拂

同

述懐

艸庵を捨て出る時

きゆる時は氷もきえてはしる也  
子を獨守りて田を打爛かな  
餘所の田の蛙入ぬも浮世かな

路通  
快宣  
落梧

高野にて

散花にたぶさ恥けり奥の院  
櫻見て行あたりたる乞食哉

杜國  
梅舌

高野にて

父母のしきりに戀し雉子の聲  
あやめさす軒さへよそのついで哉

芭蕉  
荷兮

○たぶさ云々有髮の姿を恥づるなり。

○父母の玉葉集、行基の歌「山鳥のほろく」となく聲きけば父かと思ふ母かと思ふ」による。

さうぶ入湯をもらひけり一盤

同

一本のなすびもあまる住居かな  
肩衣は戻子にてゆるせ老の夏  
似はしや白髪にかづく麻木賣

杏雨  
杉風  
龜洞

九月十日素堂の亭にて

かくれ家やよめ菜の中に残る菊  
かり家を食るさくくの垣穂かな

嵐雪  
曉鰯

人のいほりをたづねて

さればこそあれたきまゝの霜の宿

芭蕉

舊里の人に云つかはす

こがらしの落葉にやぶる小ゆび哉

杜國

鎌倉建長寺にまふで

落ばかく身はつぶね共ならばやな

越人

○傷る小指―曾參の母が、遠遊せる參を思ひて指を嚙みし故事による。

○つぶね―奴僕。

○人のいほりを―貞享四年三河國伊良古崎なる杜國を訪ねし折の吟。

○さよりー針魚。

ある人のもとより、見よやとて落葉を一籠おくられて  
あはれなる落葉に焼や島さより

荷 兮

○たらちめー親又は母の義。

古郷の事思ひ出る曉に

たらちめの暖甫や冷ん鐘の聲  
楳の火に親子足さす侘ね哉  
目や遠う耳やちかよるとしのくれ  
ふるさとや臍の緒に泣年の暮  
さまざまの過しをおもふ年のくれ

鼠 彈 去 來 西 武 芭 蕉 除 風

○故郷やー貞享四年十二月郷里に歸りての吟。

老をまたずして鬢先におとろふ

行年や親にしらがをかくしけり

越 人

戀

○一有妻ー園女なり。一有は斯波氏、伊勢の人。

春の野に心ある人の素貞哉 伊勢一有妻

○妹が垣根ー堀川百首に

「昔見し妹が垣根はあれにけりつばなまじりの葦のみして」。この歌徒然草にも引かれたり。

○六宮云々ー白樂天の長恨歌中の句。

きぬくや餘のことよりも時鳥  
蚊屋出て寐がほまたみる別かな  
むし干の目に立枕ふたつかな  
虫干に小袖着て見る女かな  
さゝげめし妹が垣ねは荒にけり

六宮粉黛無顔色

除 風 長 虹 文 瀾 冬 文 心 棘

宵闇の稻妻消すや月の顔  
一めぐり人待かぬるをどりかな  
さびしき折に

長 虹 尙 白

つまなしと家主やくれし女郎花  
しりながら薄に明るつまどかな  
妻の名のあらばけし給へ神送り  
松の中時雨、旅のよめり哉

荷 兮 小 春 越 人 俊 似

○知りながらー待つ戀の情。

○鉢敲き—原本「鉢敲き」とあり。

物おもひ火燧を明あけていかならむ  
うたゝねに火燧消きえたる別れ哉  
山畑にももの思はゞや蕪引  
きぬぐを霞見よとて戻りけり  
おそろしやきぬぐの比鉢敲たき

舟 泉  
嵐 蓑  
松 芳  
冬 松  
昌 碧

無常

末期に

○散る花を—此句其角の雜談集にもいへる如く實は辭世に非ずしてたゞ觀想の吟なり。守武の辭世は別に「朝顔にけふは見ゆらん我世かな」の句あり。

散る花を南無阿彌陀佛と夕哉  
無常迅速

守武

咲つ散つひまなきけしの鳥哉  
末期に

傘下

南無や空たゞ有明のほとゝぎす堺

元順

松坂の浮瓢といふ人の身まかりたるにいひやりける

橘のかほり顔見ぬばかり也

荷兮

いもうとの追善に

手のうへにかなしく消る螢かな

去來

ある人子うしなはれける時申遣す

あだ花の小瓜とみゆるちぎりかな

荷兮

世をはやく妻の身まかりける比

水無月の桐の一葉と思ふべし

野水

辭世

あはれ也燈籠一つに主マコマ齊

子おにおくおれける比

似た顔のあらば出てみん一躍り

落梧

一原野にて

○妹—去來の妹千代子（俳號千子）長崎の御船手清水藤右衛門に嫁す。元祿元年五月十五日歿。辭世の句に「もえやすく又消えやすく螢哉」。

○コ齋—江戸の人、元祿元年七月廿一日歿す。なほ此句作者名なきも作者はコ齋なる事、又正しくは中七「一つの」たるべき事、白雪の誹諧曾我等に見ゆ。

○一原野—洛北市原野。小町寺あり、あなめの薄とて生ひたり。

をく露（露）や小町がほねの見事さよ 釣雪

妻の追善に

をみなへししでの里人それたのむ 自悦

李下が妻のみまかりしをいたみて

ねられずやかたへひえゆく北おろし 去來

コ齊（齊）身まかりし後

その人の躰（躰）さへなし秋のくれ 其角

母におくれける子の哀れを

おさな子（子）やひとり食（食）くふ秋の暮 尙白

ある人の追善に

埋火もさゆやなみだの烹（烹）る音 芭蕉

旅にてみまかりける人を

あは雪のとゞかぬうちに消（消）にけり 鼠彈

鳥邊野（鳥邊野）かたや念佛の冬の月 加賀小春

### 曠野集 卷之八

#### 釋教

伊勢にて

神垣（神垣）やおもひもかけず涅槃像 芭蕉

負てくる母おろしけりねはんぞう 鼠彈

西行上人五百歳忌に

はつきりと有明残る櫻かな 荷兮

おなじ遠忌に

連翹（連翹）や其望日としほ（を）れけり 胡及

うで首に蜂の巢かくる二王哉 松芳

○ある人の追善に―笈日記には「少年を失へる人の心を思ひやりて」とあり。

○李下―江戸の人、芭蕉門。

○神垣や！金葉集、西行の歌「神垣のあたりと思へどゆふだすき思ひもかけぬかねの音哉。」

○西行上人五百歳忌―元祿二年なり。

○その望の日―西行の「願はくは」の歌による。

○木履はく一笈の小女に初瀬にての句として「足駄はく僧も見えたり花の雨」と有り。

○花に酒一五元集に「日輪寺の僧と連歌のかたはらに對照して」と詞書あり。

○序品の心一法華經序品に「天雨曼陀羅華摩訶曼陀羅華曼珠沙華摩訶曼珠沙華、散佛上及諸大衆」。

○龍女成佛一法華經提婆達多品に出づ。

○蛇の玉一涙を龍女の寶珠に比す。標註にへびの玉は草の名と註したれど、未詳。

○海士の家一諸曲八島「何旅人は都の人と申すか、さらば御宿をかし申さん。しかも今宵はてりもせずくもりも果ぬ春の夜のし。」

○ふべん一不辨。貧乏なるをいふ。

○江湖部屋一江湖僧（曹洞宗にて學問僧をいふ）の一夏修行をなす所。

○奈良にて一笈の小女に、「灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、鹿の子を産を見て此日におゐておかしければ」と詞書あり。

木履はく僧も有けり雨の花  
つりがねを扇で鼓く花の寺  
花に酒僧とも侘ん鹽さかな  
其冬松  
角

貞享つちのへ辰の歳、彌生一日東照宮の別當、僧正の御房に、慈惠大師遷座執事法華八講の侍るよし、尊き事なれば聽聞にまかりて、序品のころを

散花の間はむかしばなし哉  
越人

女房の聽聞所と覺て、御簾たれおく暗き所あり、龍女成佛の所に至りて、しのびあへず鼻かむ聲のしければ

ほろくと落るなみだやへびの玉  
同  
觀音の尾上のさくら咲にけり  
俊似  
古寺やつるさぬかねの菫草  
一井

八島にて

海士の家聖よびこむやよひ哉  
伊豫千  
咲にけりふべんな寺の紅牡丹  
一井  
夏山や木蔭くの江湖部屋  
燕葉  
奈良にて

灌佛の日に生れ逢ふ鹿の子哉  
芭蕉  
灌佛の其比清ししらがさね  
尙白

高野にて

腰のあふぎ禮義ばかりの御山哉  
一雪  
齋に來て菴一日の清水哉  
加賀一笑

十如是

おもふ事ながれて通るしみづ哉  
荷兮  
即身即佛

夏陰の晝寐はほんの佛哉  
愚益

○折かけ—細く削りたる竹二本を四つ手の如く方形の板にさしこみて紙を張りし手輕なる燈籠なり。  
○石籠—蛇籠なり。

○鶉、不圖—原本、鶉、不圖とあり、今改む。

ほころびや僧の縫ぬいおる夏衣 鼠 彈  
おどろくや門もてありく施餓鬼棚 荷 兮  
折かけの火をとるむしのかなしさよ 探 丸  
石籠に施餓鬼の棚のくづれ哉 文 里  
魂祭舟より酒を手た向むかけり 龜 洞  
たまたつり道ふみあくる野菊哉 卜 枝  
攝待のはしら見たてん松の陰 釣 雪

平等施一切

攝待にたゞ行人をとゞめけり 俊 似  
稻妻に大佛おほがむ野中哉 荷 兮  
垣越に引導ひき覗くばせを哉 卜 枝

ある人四時の景物なりとて、水鶏と鶉とを不食、不圖其心を感じて、我も鶉をくらはず

鶉くはぬ心佛にならばぬぞ 荷 兮  
ある寺の興行に

○かへりうて—謠曲難波に「今の太鼓ば波なればよりてはうちかへりては打つし(撮解)かへりの語に秋季をもたせり。  
○鉢の子—托鉢する鉢。

燕も御寺の鼓かへりうて 其 角  
進み出て坊主おほかしかしや月の舟 一 井  
鉢の子に木綿をうくる法師哉 卜 枝  
人のもとにありて、たち出むとしけるに、またしぐれければ

○安國論寺—松葉谷にあり、日蓮上人四年籠られし所也(標注)。此寺にて安國論を草せり。

衣着て又はなしけり一時雨 鼠 彈  
鎌倉の安國論寺にて  
たうふとさの涙や直に氷るらん 越 人  
古寺の雪

曙や伽藍あまくの雪見廻めぐひ 荷 兮  
同

雪折やかゝる二玉の片腕 俊 似

○千観—千観法師、攝津金龍寺に住み、往來の旅人のため自ら馬夫となりしといふ(扶桑隱逸傳)。五元集には「大津驛」と前置して「千観の馬もせはしやとしの暮」とあり。

○かぜはし—原本「かせかし」とも讀まる。然らば貸せかしの意ならん。

○薬王品—法華經にあり。

○ついで—微雨。

○さしげ—大角豆。

つくり置てこはされもせじ雪佛  
朝寐する人のさはりや鉢鼓たき  
千観が馬もかぜはし年のくれ

一井  
文潤  
其角

薬王品七句

如寒者得火

まつ白にむめの咲たつみなみ哉

胡及

如裸者得衣

雪の日や酒樽拾ふあまの家

如商人得主

双六のあひてよびこむついでり哉

如子得母

竹たてゝををけば取つくさしげかな

如渡得船

月の比隣の榎木きりにけり

如病得醫

かはくとき清水見付る山邊哉

如暗得燈

秋のよやおびゆるときに起さるゝ

神 祇

古宮や雪しるかゝる獅子頭

釣雪

○雪しる—雪汁。雪解水いぶ。  
○奉納—尾張櫻天満宮の奉納句(通旨)。

二月廿五日奉納に

きさらぎや廿四日の月の梅  
しんくと梅散かゝる庭火哉  
鶯も水あびてこよ神の梅  
上下のさはらぬやうに神の梅

荷兮  
同  
龜洞  
昌碧

○覺えなく―知らず識ら  
ず。

灯のかすかなりけり梅の中  
 何とやらおがめば寒し梅の花  
 覺えなくあたまぞさがる神の梅  
 月代もしみるほど也梅の露  
 門あかで梅の瑞籬おがみけり  
 繪馬見る人の後のさくら哉  
 花に來て齒朶かざり見る社哉  
 宮の後川渡り見るさくら哉  
 御手洗の木の葉の中の蛙哉  
 ほとゝぎす神樂の中を通りけり  
 宮守の灯をわくる火串かな  
 破扇一度にながす御被かな  
 川原迄瘡まぎれに御被哉

釣雪  
 越人  
 舟泉  
 雨桐  
 重五  
 玄察  
 鈍可  
 李桃  
 好葉  
 玄察  
 龜洞  
 未學  
 荷兮

○火串―ほぐし。夏山の歌  
を狩るに、闇夜小炬を串  
につけて地にさすをい  
ふ。

○きしらぬ―高砂の謠に  
「久しき代々の神かくら  
夜のつゝみの」と有り。

○葛城の神―一言主神、か  
たち醜きを恥ぢて晝はか  
くれ夜のみ働きしといふ  
神なり。されば庭火も明  
るすきては困るならんと  
の作意。

○肩衝―茶入。

こがらしや里の子覗く神輿部屋  
 此月の惠比須はこちにおます哉  
 冬ざれや禰宜のさげたる油筒

尙白  
 松芳  
 落梧

若宮奉納

きしらぬ哥も妙也神々樂  
 跡の方と寐なをす夜の神樂哉  
 鈴鹿川夜明の旅の神樂哉  
 かづらきの神にはふとき庭火哉  
 橋杭や御被かゝる煤はらひ

利重  
 野水  
 昌碧  
 村俊  
 卜枝

祝

肩付はいくよになりぬ長閑也 冬 文

荷分が四十の春に



○いきみたまー一三〇頁頭  
註参照。

○先祝へー此句巴靜の刷毛  
序(寶永三年刊)に出で、  
「權七にしめす」と題せる  
一文につゞけり。權七は  
荷今の忠僕なり。

幾春も竹其儘に見ゆる哉 重五  
 君が代やみがくことなき玉つばき 越人  
 青苔のは何ほどもとれ沖の石 傘下  
 いきみたま壘の上に杖つかん 龜洞  
 千代の秋にほひにしるしことし米 同  
 しばしかくれるける人に申遣す  
 先祝へ梅を心の冬籠り 芭蕉

### 曠野集員外

○東四明ー東叡山をいへり。

○佐川田喜六ー永井直勝の臣、名は昌俊、和歌を善くし、吉野山花まつころの朝な、心にかゝる峰の白雲の吟、後陽成天皇の御感を蒙れりといふ(續近世時人傳)。

○田野へー葛飾。

○虎の物語ーこの話小學致知類に出づと(大鏡)。

○猿を聞てー杜甫の秋興の詩句に「聽猿實下三聲淚」。

誰か華をおもはざらむ。たれか市中にありて朝のけしきを見む。

我東四明の麓に有て、花のこゝろはこれを心とす。よつて佐川田

喜六の、よしの山あさなくといへる哥を、實にかんず。又

麥喰し鴈と思へどわかれ哉

此句尾陽の野水子の作とて、芭蕉翁の傳へしをなを(註)ざりに聞しに、さいつ比、田野へ居をうつして、實に此句を感ず。むかしあまた有ける人の中に、虎の物語せしに、とらに追はれたる人ありて、獨色を變じたるよし、誠のおほふべからざる事左のごとし。猿を聞て實に下る三聲のなみだといへるも、實の字、老杜のこゝろなるをや。猶鴈の句をしたひて

麥をわすれ華におぼれぬ鴈ならし 素堂

この文人の事づかりてとよけられしを、三人開き幾度も吟じて

手をさしかさす峰のかげろふ

野

鑢かんじきの路もしどろに春の來て

越

ものしづかなるおこし米うり

人

門の石月待まち闇のやすらひに

水

風の目利めきを初秋の雲

人

武士の鷹うつ山もほど近し

人

しをりについて瀧の鳴る音

水

袋より經とり出す草のうへ

人

づぶと降られて過るむら雨

人

立かへり松明たいまち直ぎる道の端

水

千句いとなむ北山のてら

人

姥ざくら一重櫻も咲残り

人

○おこし米—糯米を蒸して炒り香ばしきもの。今の「おこし」は之にてつく。  
○風の目利—風模様の観測。  
○鷹うつ—鷹を捕ふること。

○直ぎる—ねぎる。

○千句—洛北大原の三千院にて興行せる大原千句など想はる。

○あてこともなき—何の目當とするものも無きの意。漫然たるさま。東華集「冬の野にあてこともなき月夜哉 二春」

○冢子に—冢子の祝ひに。

○柏木—源氏物語中の人物。

あてこともなき夕月夜かな

露の身は泥のやうなる物思ひ

秋をななをなく盗人の妻

明るやら西も東も鐘の聲

さぶらなりたる利根かねの川舟

冬の日のてかくとしてかき曇くも

冢子つかこに行ゆと羽織うち着て

ふらくとよきのふの市の鹽いなだ

狐つきとや人の見るらむ

柏木の脚氣の比のつくくと

さゝやくことのみな聞えつる

月の影より合にけり辻相撲

秋になるより里の酒桶

水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水

人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水

○步鶴—步行して鶴をつかふこと。

○不破の萬作—關白秀次の小姓にて、美少年の名高かりき。秀次自刃の時高野山にて殉死す。時年十八。

○かへとり—浚渫。

○しめさす—蝸とる場所を固ひ定むるなり。一説、蝸とる人の浪間に點々たるを、標木を立てし如しと見立てしなり。  
○舟間—舟の入荷のとだえし間をいふ。

露しぐれ歩鶴に出る暮かけて  
うれしとしのぶ不破の萬作  
かしこまる諫に涙こぼすらし  
火箸のはねて手のあつき也  
かくすもの見せよと人の立かゝり  
水せきとめて池のかへとり  
花ざかり都もいまだ定らず  
捨て春ふる奉加帳なり  
墨ぞめは正月ごとにわすれつゝ  
大根きざみて干にいそがし  
遠淺や浪にしめさす蝸とり  
はるの舟間に酒のなき里

昌 野 舟 筆 龜 荷 今  
碧 水 泉 雪 洞 兮 兮  
今 水 人 兮 水 人 兮

○筆—執筆(俳諧の席上にて句を懷紙に記す役)の略。  
○一駄—一頭の馬につくる荷。  
○宜禰—きね。禰宜。  
○麻—ぬさと訓むべきか。幣帛なり。  
○年榮—としばへの宛字。年ばい。  
○めつたに—むやみに。  
○湯殿—出羽の湯殿山。  
○たらかされ—だまされ。

のどけしや早き泊に荷を解て  
百足の懼る薬たさけり  
夕月の雲の白さをうち詠  
夜寒の蓑を裾に引きせ  
荻の聲どこともしらぬ所ぞや  
一駄過して是も古綿  
道の邊に立暮したる宜禰が麻  
樂する比とおもふ年榮  
いくつともなくてめつたに藏造  
湯殿まいりのもめむたう也  
涼しやと蕙もてくる川の端  
たらかされしや糸る月  
秋風に女車の髭おとこ

昌 野 舟 釣 昌 荷 龜 筆 釣 舟 野 昌  
碧 水 泉 雪 碧 兮 兮 洞 雪 泉 水 碧  
今 水 人 兮 水 人 兮

○法輪—法輪寺。

○八重山吹—花おそし。女の年頃すぎし事に應ず。

○むく起—起きるとすぐ。

○高田派—伊勢一身田専修寺を本山とする眞宗の一派。

伴諧七部集

二三四

袖ぞ露けき嵯峨の法輪  
 時／＼にもものさへくはぬ花の春  
 八重山吹ははたちなるべし  
 日のいでやけふは何せん暖に  
 心やすげに土もらふなり  
 向まで突やるほどの小ぶねにて  
 垢離かく人の着もの番  
 配所にて干魚の加減覚えつゝ  
 哥うたふたる聲のほそく  
 むく起に物いひつけて亦睡り  
 門を過行茄子よびこむ  
 いりこみて足輕町の藪深し  
 おもひ逢たりどれも高田派

釣雪 昌碧 野水 舟泉 龜洞 荷今 野水 舟泉 釣雪 龜洞

○小湊—日蓮上人生誕地。

○桶のかづら—桶の簾(タガ)。

○田作りに—ごまめにて精進落ちをするとなり。

盃もわするばかりの下戸の月  
 や／＼はつ秋のやみあがりなる  
 つばくらもおほかた歸る寮の窓  
 水しほはゆき安房の小湊  
 夏の日や見る間に泥の照付て  
 桶のかづらを入しまひけり  
 人なみに脇差さして花に行  
 ついたつくりにも落る精進

昌碧 野水 舟泉 龜洞 荷今 昌碧 釣雪 野水

美しき鯰うきけり春の水  
 柳のうらのかまさりの卵  
 夕霞染物とりてかへるらん  
 けぶたきやうに見ゆる月影

舟泉 松芳 冬文 荷今

職野集員外

一二五

○火鼠—竹取物語に火鼠の妻を唐土に求めしこと見ゆ。

秋草のとてもなき程咲みだれ  
 弓ひきたくする勝相撲とて  
 けふも亦もの拾はむとたち出る  
 たま〜砂の中の木のはし  
 火鼠の皮の衣を尋きて  
 涙見せじとうち笑ひつゝ  
 高みより踏はずしてぞ落にける  
 酒の半に膳もちてたつ  
 幾年を順禮もせず口おしき  
 よまで双紙の繪を先にみる  
 なに事もうちしめりたる花の貌  
 月のおぼろや飛鳥井の君  
 灯に手をおほひつゝ春の風

松 舟 荷 冬 松 舟 松 荷 冬 松 舟 松 荷 冬 松 舟  
 芳 泉 兮 文 兮 泉 兮 文 兮 泉 兮 文 兮 泉 兮 文 兮 泉 兮 文 兮 泉

○飛鳥井の君—狭衣物語に出づ。太秦に参籠せるをり威儀師に奪はれしを、狭衣中將に助けられし時の倅。

○隆辰—隆達。堺顯本寺の僧、小唄に巧にして天正文祿の頃隆達節をはじめ世に行はる。

數珠くりかけて脇息のうへ  
 隆辰も入齒に聲のしはがるゝ  
 十日のさくのおしき事也  
 山里の秋めづらしと生鱒  
 長持かふてかへるやゝさむ  
 ざぶ〜とながれを渡る月の影  
 馬の通とをれば馬のいなゝく  
 さびしさは垂井の宿の冬の雨  
 菫ふまへて蕎麥あふつみゆ  
 つく〜と錦着る身のうとましく  
 曉ふかく提婆品よむ  
 けしの花とりなをす間に散にけり  
 味憎するをとの隣さはがし

松 舟 荷 冬 松 舟 冬 荷 舟 松 舟 冬 荷 舟 松 舟  
 芳 泉 兮 文 兮 泉 兮 文 兮 泉 兮 文 兮 泉 兮 文 兮 泉 兮 文 兮 泉

○垂井—美濃國。  
○あふつ—あふる。  
○提婆品—法華經にあり。

○赤貝はきて一貝に繩を通しそれに乗りて小兒が遊ぶなり。

○瀑一さらし(晒布)と訓むべし。

○たてる一閉づるとの説あれど、なほ立てるなるべし。

○かたぎ一西馬は「容儀又傾か未詳」といひ、曲齋はかたへの誤なりといひ、何丸はかたぎは堅木にして、琵琶は枇杷の書損じなりといへり。思ふに、かたぎはやはり氣質にて、琵琶めきし古典的なる趣の車との意か。

○からかひ一争ひなり。

黄昏の門さまたげに薪分  
次第くにあたゝかになる  
春の朝赤貝はきてありく兒  
顔見にもどる花の旅だち  
きさらぎや瀑をかひに夜をこめて  
そら面白き山口の家

荷 冬 舟 冬 荷  
兮 文 泉 文 兮

ほとゝぎす待ぬ心の折もあり  
雨のわか葉にたてる戸の口  
引捨し車は琵琶のかたぎにて  
あらさがなくも人のからかひ  
月の秋旅のしたさに出る也  
一荷になひし露のきくらげ

荷 野 同 荷 野  
兮 水 兮 水

○土肥一糞汁腐草等を土にしみこませて乾せしもの。

○ついはり一衝張、強梁をいふ。

○代参り一人の代りに神社佛閣に詣ること。

○鶯つけに一鶯の附子をしに。

初あらしはつせの寮の坊主共  
菜畑ふむなとよばりかけたり  
土肥を夕くにかきよせて  
印判おとす袖ぞ物うさ  
通路のついはりこけて逃かへり  
六位にありし戀のうはきさ  
代まいりたゞやすくと請おひて  
錢一貫に鯉一節  
月の朝鶯つけにいそぐらむ  
花咲けりと心まめなり  
天仙蓼に冷食あさし春の暮  
かけがねかけよ看經の中  
たゞ人となりて着物うちはをり

水 兮 同 水 同 兮 同 水 同 兮 同 水 同 兮 同 水 同 兮 同

○駒の宿―信濃望月の駒迎は八月十六日、甲斐の駒迎は同十七日(公事根源)

○生身魂―陰曆七月八日より十三日迄の吉日をえらび、存生の二親に供養し長壽をいのるこゝし。

○縦―原本「椶」とあり。

○きつき―強き。

夕せはしき酒ついでやる  
 駒のやど昨日は信濃けふは甲斐  
 秋のあらしに昔淨瑠璃  
 めでたくもよばれにけらし生身魄  
 八日の月のすきといるまで  
 山の端に松と縦とのかすかなる  
 きつきたばこにくらくとする  
 暑き日や腹かけばかり引結び  
 太鼓たつきに階子のぼるか  
 ころくゝと寐たる木賃の艸枕  
 氣だてのよきと聲にほしがる  
 忍ぶともしらぬ顔にて一二年  
 庇をうけて住居かはりぬ

兮 水 兮 水 兮 水 兮 水 兮 水 兮 水 兮

○数むつかし―数多きがわづらはし。

○段々―段々に花が咲くとなり。

三方の数むつかしと火にくぶる  
 供奉の艸鞋を谷へはきこみ  
 段くゝや小鹽大原嵯峨の花  
 人おひに行はるの川岸

同 水 同 筆

月さしのぼる氣色は、晝の暑さもなくなるおもしろさに、柄をさしたらばよき團と、宗鑑法師の句をすむじ出すに、夏の夜の疵といふ、なを其跡もやますつゞきぬ。

○月に柄を―萬葉の「久方の天ゆく月を綱にさし我大君はきぬがさにせり」をふまへたり。  
○蚊の―其角の句「夏の月蚊を疵にして五百兩(温故集)」と同工。

月に柄をさしたらばよき團哉  
 蚊のおるばかり夏の夜の疵  
 とつくりを誰が置かへてころぶらん  
 おもひがけなきかぜふきのそら  
 眞木柱つかへおさへてよりかゝり

越 人 傘 下 同 人

使の者に返事またする  
 あれこれと猫の子を選るさまくくに  
 としたくくるまであはう也けり  
 どこでやら手の筋見せて物思ひ  
 まみおもたげに泣はらすかほ  
 大勢の人に法華をこなされて  
 月の夕に釣瓶繩うつ  
 喰ふ柿も又くふかきも皆澁し  
 秋のけしきの畑みる客  
 わがまゝにいつか此世を背くべき  
 寐ながら書か文字のゆがむ戸  
 花の賀にこらへかねたる涙落つ  
 着ものゝ糊のこはき春かぜ

○こなされゝ悪口を云はれ  
 へこまされる。  
 ○繩うつゝより合せる。  
 ○花の賀―正月より六月ま  
 でに生れたるは花の賀、  
 七月より十二月までに生  
 れたるは紅葉の賀を祝ふ  
 (大鏡)。

同筆下同人同下同人同下同人

○獨鉛鎌首―六百番歌合の  
 時顯昭は手に獨鉛を持  
 ち、寂蓮は鎌首をもたげ  
 て相争へり(井蛙抄)。

○請―請人、保證人。  
 ○其―詩幽風に「七月食瓜、  
 八月斷壺、九月叔苙」。毛  
 傳に苙、麻子(アサノミ)也  
 といへり。但しこゝに  
 ては「あさ」とのみ訓む  
 外なかるべし。或はつと  
 とよみ、或は苙の誤とな  
 し、諸説多けれども従ふ  
 べからず。

うち群て浦の管屋の鹽干見よ  
 内へはいりてなをほゆる犬  
 酔ざめの水の飲たき比なれや  
 たゞしづかなる雨の降出し  
 歌あはせ獨古鎌首まいらるゝ  
 また獻立のみなちがひけり  
 灯臺の油こぼして押かくし  
 臼をおこせばきりくす飛  
 ふく風に糸のころぐさのふらくと  
 半はこはす筑やまの秋  
 むつくと月みる顔の親に似て  
 人の請にはたつこともなし  
 にぎはしく瓜や直やを荷ひ込

同人同下同人同下同人同下同人



○おろく／＼粗勿なるさま。こゝは淋しき宿のさま也。

○小諸―信濃國。

○百萬―謠曲百萬に見ゆ。

○田樂―田樂豆腐。

干せる壘のころぶ町中  
 おろく／＼と小諸の宿の晝時分  
 皆同音に申念佛  
 百萬もくるひ所よ花の春  
 田樂きれてさくら淋しき  
 人 下 人 下 人

深川の夜

○からびずや―からびは枯び、やは反語。「からびたらずや、からびたり」の意。雁聲に蕭散の情を味ふなり。大鏡・婆心録等の説は誤れり。

○大きき五石―莊子に出づる故事。一五一頁頭註參照。

鴈がねもしづかに聞ばからびずや  
 酒しぬならふこの比の月  
 藤ばかま誰窮窟にめでつらん  
 理をはなれたる秋の夕ぐれ  
 瓢箪の大きき五石ばかり也  
 風にふかれて歸る市人  
 越 人  
 芭 蕉  
 同 越 人  
 芭 蕉  
 同 越 人

○長安は―白樂天の詩句に「長安古來名利地、空手無金行路難」。

○すべり來ぬ―膳部に手もつけず、そのまゝ下り來るなり。  
 ○月と花―標注に「連や眞野の濱邊に駒とめて比良の高根の花を見るかな」(賴政)の歌を引けり。

なに事も長安は是名利の地  
 醫のおほきこそ目ぐるほしけれ  
 いそがしと師走の空に立出て  
 ひとり世話やく寺の跡とり  
 此里に古き玄番の名をつたへ  
 足駄はかせぬ雨のあけぼの  
 きぬくやあまりかほそくあてやかに  
 かぜひきたたまふ聲のうつくし  
 手もつかず晝の御膳もすべりきぬ  
 物いそくさき舟路なりけり  
 月と花比良の高ねを北にして  
 雲雀さえづるころの肌ぬぎ  
 破れ戸の釘うち付る春の末  
 同 越 人  
 芭 蕉  
 越 芭 蕉 人  
 芭 蕉 人  
 越 芭 蕉 人  
 芭 蕉 人  
 越 芭 蕉 人  
 芭 蕉 人  
 同 越 人

○家なくて―家は鏡の匣コトをいふ。

見世はさびしき麥のひきはり  
家なくて服セ装ゾウにつゝむ十寸鏡  
ものおもひゐる神子カミゴのものいひ  
人去ヒていまだ御坐オホの匂ニひける

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人

○初瀬に「春の夜や籠り人ゆかし堂の隅 芭蕉ハヤシの笈ウチの小文」。

初瀬に籠る堂の片隅  
ほとゝぎす鼠のある、最中に

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人

○垣ほ―垣ねに對する語。ほは上方、ねは下方をいへど、實はいづれもたゞ垣の意に用う。

垣穂のさゝげ露はこぼれて  
あやにくに煩ふ妹が夕ながめ  
あの雲はたがなみだつゝむぞ

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人

○行く月の―源氏夕顔の巻の歌に「山の端の心も知らで行く月はうはの空にてかげや絶えなむ」。

行月のうはの空にて消クさうに  
碯イソも遠く鞍イにいねぶり  
秋の田をからせぬ公事クジの長びきて  
さいくながら文字問モトにくる

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人

○公事―訴訟事件。

○馳走する子―奔走チソウ子。大事にする子。

いかめしく瓦庇カの木薬屋  
馳走する子の瘦ヤてかひなき  
花の比談義ヒ參マもうらやまし  
田にしをくふフて腥ニきくち

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人

翁に伴なはれて來る人のめづらしきに

○落着―おちつき。訪客を落つかす爲に先づすゝむるもの。  
○三夜さ―待宵・名月・既望なり。

落着に荷カ分の文や天津雁  
三夜さの月見雲なかりけり  
菊萩の庭に疊フを引ヒづりて  
飲ヒてわするゝ茶は水になる  
誰か來て裾スにかけたる夏衣  
齒ハぎしりにさへあかつきのかね  
恨ウたる泪ナまぶたにとゞまりて

蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人

○誰か―原本「唯か」に作れり。今改む。

○靜御前に―鶴岡八幡にて舞ひしこと吾妻鏡に見ゆ。

○かげの病―一體分身して形と影との如くなる病。前句の靜より謠曲の二人靜に因みたる作意なるべし。

○煩―「なやみ」とも「やまひ」とも訓むべし。なほ越人自筆の此卷には「煩の」の「の」字なく、ワグラヒとよむものゝ如し。

○酒熟き―越人自筆に、酒熟きと傍訓有り。

○そめいろ―梵語蘇迷盧の亂。須彌山、妙高山。句は富士を之に比せしなり。

○うれしき袖―さほきの誤か。新勅撰「嬉しきの昔は袖に包みけりこよひは身にも餘りぬる哉」。

○西王母、東方朔―共に長壽の人。

○衣の妻―衣の端。

○穴―地に小孔を穿ち錢をなげ入るゝ小兒の遊戯。

○伊勢の―田舎には八朔に雛を飾る風習の所もあるなり。

○不斷櫻―伊勢の白子觀音寺の名木。

○念者―義兄弟の兄分の者をいふ。

○弓―窓のさゝへの竹を云ふ。

靜御前に舞をすゝむる  
空蟬の離魂の煩のおそろしき  
あとなかりける金二萬兩  
いとをしき子を他人とも名付けたり  
やけどなをして見しつらきかな  
酒熟き耳につきたるさゝめごと  
魚をもつらぬ月の江の舟  
そめいろの富士は淺黄に秋のくれ  
花とさしたる草の一瓶  
饅頭をうれしき袖に包みける  
うき世につけて死ぬ人は損  
西王母東方朔も目には見ず  
よしや鸚鵡の舌のみじかき

角 同 人 角 角 同 人 同 角 同 人 同 角

あぢきなや戸にはさまるゝ衣の妻  
戀の親とも逢ふ夜たのまん  
やゝおもひ寐もしねられずうち臥て  
米つく音は師走なりけり  
夕鴉宿の長さに腹のたつ  
いくつの笠を荷ふ強力  
穴いちに塵うちはらひ草枕  
ひいなかざりて伊勢の八朔  
満月に不斷櫻を詠めばや  
念者法師は秋のあきかぜ  
夕まぐれまたうらめしき紙子夜着  
弓すゝびたる突あげのまど  
道ばたに乞食の鎮守垣ゆひて

同 角 同 人 同 角 同 人 同 角 同 人 同 角

○あさつき膾―胡葱膾。胡葱を青く茹で淺蛸等と酢味噌和へにす。  
○よびつぎの濱―尾張國愛知郡。

ものきゝわかぬ馬士の闇とり  
花の香にあさつき膾みどり也  
むしろ敷べき喚續の春  
同人

○外面―何丸・西馬はソトモと訓み家の後なりといへり。

○ほそりやる―當時の唄にほそりといふがあり。その唄をうたふ細やかなる聲のさまなるべし。  
○はなれく―の―古き小唄に「はなれく」のあの雲見ればあすの別れもあかしく。

我もらじ新酒は人の醒やすき  
秋うそ寒しいつも湯嫌  
月の宿書を引ちらす中にねて  
外面薬の草わけに行  
はねあひて牧にまじらぬ里の馬  
川越くれば城下のみち  
瘡瘡貌の透とをるほど齒のしろさ  
唱歌はしらず聲ほそりやる  
なみだみるはなれくのうき雲に  
同人  
嵐雪  
同人

○此巻につき越人の「猪の早太」に「先にあら野撰集の時、嵐雪、越人兩吟の歌仙後の一折、翁の心に應ぜざるところありと削捨て、たゞ一折をあらはし給へり云々」とあれば芭蕉の意志にて以下掲げざりしにや。

後ぞひよべといふがはりなき  
今朝よりも油あげする玉だすき  
行燈はりてかへる浪人  
着物を礎にうてと一つ脱  
明日は髪そる宵の月影  
しら露の群て泣ぬる女客  
つれなの醫者の後姿や  
ちる花に日はくるれども長咄  
よぶこ鳥とは何をいふらん  
初雪やことしのびたる桐の木に  
日のみじかきと冬の朝起  
山川や鶉の喰ものをさがすらん  
野水  
落梧  
同人

○長櫃の萩―橋爲仲陸奥守の任けて、歸る時宮城野の萩を長櫃十二合に入れて都に上る。京に入る日貴賤群衆して見物し、御幸潜びて成りけりと(無名抄)。

○歩―夫役。さゝるゝは指命さるゝなり。

○すがゝき―歌無くて手のみの箏曲。

○あちな―奇妙な。

○さく―行く。

賤を遠から見るべかりけり  
おもふさま押合月に草臥つ  
あらことくし長櫃の萩  
川越の歩にさゝれ行穰の雨  
ねぶと痛がる顔のきたなき  
わがせこをわりなくかくす縁の下  
すがゝき習ふ比のうきこひ  
更る夜の湯はむつかしと水飲て  
こそぐり起す相住の僧  
峰の松あちなあたりを見出たり  
旅するうちの心寄麗さ  
烹た玉子なまのたまごも一文に  
下戸は皆いく月のおぼろげ

野落

水 同 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧

○しかく―紫心録に大和物語の故事を引きて解けり。醍醐天皇、或御曹司にて公忠をして清げなる女の髪ふりおほひて泣くを問はせ給ふに女答へもせず。公忠「思ふらん心の中は知らねども泣くをみるこそ悲しかりけれ」とよみしと。

○蓮道―貴人の通る際道に蓮を布くをいふ。枕草子、大進生昌の第に中宮行啓の條などにも見えたり。

○月こそきはれ―枕草子の前條、生昌の第の門小さく車さはりて入らずとあるを打掠めたり。

耳や齒やようても花の数ならず  
具足めさせにけふの初午  
いつやらも鶯聞ぬ此おくに  
山伏住て人しかるなり  
くはらくとくさびぬけたる米車  
挑灯過て跡闇きくれ  
何事を泣けむ髪を振おほひ  
しかく物もいはぬつれなき  
はつかしといやがる馬にかきのせて  
かゝる府中を飴ねぶり行  
雨やみて雲のちぎるゝ面白や  
柳ちるかとの例の蓮道  
軒ながく月こそさはれ五十間

水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 同

○くらがり峠―大和河内の國境、生駒山脈の低部を越ゆ。

寂しき秋を女夫居りけり  
占を上手にめさるうらやまし  
黍もてはやすいにしへの酒  
朝ごとの干魚備るみづ垣に  
誰より花を先へ見てとる  
春雨のくらがり峠こえすまし  
ねぶりころべと雲雀鳴也

梧 水 同 梧 同 水 梧

○さきくさ、正木―さきくさは檜、正木はまさきの葛。古歌に正木の綱にて宮木曳くことなどあれば、これも檜材を正木の綱にて曳出すことならん。

一里の炭賣はいつ冬籠り  
かけひの先の瓶氷る朝  
さきくさや正木を引に誘ふらん  
肩ぎぬはづれ酒によふ人  
夕月の入ぎは早き塘ぎは

一 井  
鼠 長 胡 鼠 長 胡 鼠 長 胡 鼠  
彈 虹 及 彈 虹 及 彈 虹 及 彈

○宮司―當時は一般にミヤジとよむ。

たはらに鯽をつかみこむ秋  
里深く踊教に二三日  
宮司が妻にほれられて憂  
問はれても涙に物の言にくき  
葛籠とゞきて切ほどく文  
うとくと寐起ながらに湯をわかす  
寒ゆく夜半の越の雪鋤  
なに事かよばりあひてはうち笑ひ  
蛤とりはみな女中也

一 井  
鼠 長 胡 鼠 長 胡 鼠 長 胡 鼠  
彈 虹 及 彈 虹 及 彈 虹 及 彈

○雪すき―雪をすきとりて捨つること。

○紀伊の御靈屋―紀州名草郡濱中村長保寺にあり、紀伊家の菩提寺。一説和歌浦の東照權現宮を云へり。

浦風に脛吹まくる月涼し  
みるもかしこき紀伊の御魂屋  
若者のさし矢射てある花の陰  
蒜くらふ香に遠ざかりけり

一 井  
鼠 長 胡 鼠 長 胡 鼠 長 胡 鼠  
彈 虹 及 彈 虹 及 彈 虹 及 彈

はるのくれありきくも睡るらん  
 紙子の綿の裾に落つゝ  
 はなしする内もさいく手を洗あらひ  
 座敷ほどある蚊屋を釣けり  
 木ばさみにあかるうなりし松の枝  
 秤にかゝる人くくの興  
 此年になりて灸やいせの跡もなき  
 まくらもせずについ寐い入月  
 暮過て障子の陰のうそ寒さ  
 こきたるやうにしぼむ萩のは  
 御有様入道の宮のはかなげに  
 衣引かぶる人の足音  
 毒なりと瓜一きれも喰くはぬ也

胡 長 鼠 一 胡  
 及 虹 彈 井 及  
 長 一 鼠 胡 鼠 一 胡  
 虹 井 彈 及 虹 井 及

○こきたる―抜き取りたる。

○入道の宮―奥衣物語の女二の宮。袂衣がこの入道宮を訪ひ給へる時の俳。

○唐丸―闘鶏。外國より渡り來りし故、唐丸と云ふと。

片風たちて過る白ゆふ雨たち  
 板へぎて踏所なき庭の内  
 はねのぬけたる黒き唐丸たうまる  
 ぬくく〜と日足のしれぬ花曇  
 見わたすほどはみなつゝじ也

胡 長 鼠 一 胡  
 及 虹 彈 井 及

京寺町通二條上ル町井筒屋

筒井庄兵衛板

ひ

と

と

膳  
所



○水漿を―莊子逍遙遊に  
「惠子謂莊子曰、魏王  
胎我大瓠之種、我樹之  
而實五石、以盛水漿、其  
堅不能自舉、(中略)吾  
爲其無用、而培之、莊子  
曰、夫子固拙於用大、今  
子有五石之瓠、何不慮  
以爲大樽、而浮乎江  
湖。」  
○乾坤の外―元稹の詩句に  
「壺中天地乾坤外」。

江南の珍碩我にひさごを送り。これは是水漿をもち酒をたしな  
む器にもあらず、或は大樽に造りて江湖をわたれといへるふくべ  
にも異なり。吾また後の惠子にして用ることをしらす。つらく  
そのほとりに睡り、あやまりて此うちに陥る。醒てみるに、日月  
陽秋きらゝかにして、雪のあけぼの闇の郭公もかけたることなく、  
なを吾知人ども見えたきりて、皆風雅の藻思をいへり。しらす是  
はいづれのところにして、乾坤の外なることを、出てそのことを  
云て、毎日此内にをどり入。

元祿三六月

越智越人

花見

木のもとに汁も鱈も櫻かな 翁

西日のどかによき天氣なり 珍曲

旅人の虱かき行春暮て

はきも習はぬ太刀の鞞ヒキハダ

月待て假の内裏の司召

靱白つくる柚がはやわざ

鞍置る三歳駒に秋の來て

名はさまぐに降替かる雨

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮

中にもせいの高き山伏

いふ事を唯一方ええ落しけり

水 頌 翁 水 頌 翁 水 頌 翁 水 頌 翁

○ひきはだー革の一種、皮の皺が蟾蜍の肌膚に似たるよりいふ。かゝる革にて作りたる鞞袋を俗にひきはだと稱す。  
○靱白ー靱敷をとる白。  
○司召ー秋の除目、在京諸官を任ず。

○諏訪ー信濃國。

○ほそき筋よりー女心の狭さより思ひつめるを云ふ也。

○白子、若松ー共に伊勢の地名。

○千部讀むー淨土三部經を千人の僧の十日間に轉讀する法會、三月に行ふ。

○一身田ー伊勢國。高田派の本山専修寺あり。

○熊野見たきー増鏡の久仁親王の佛(大鏡)。又、後醍醐天皇の熊野詣を慕ひし大宮の女院の佛也と(幸田露伴氏説)。

○手束弓ー今鏡に「あさもよし紀の關守が手束弓ゆるす時なくまづあめる君」。

ほそき筋より戀つものりつゝ

物おもふ身にも喰へとせつかれて

月見る顔の袖おもき露

秋風の船をこはがる波の音

馬ゆくかたや白子若松

千部讀花の盛の一身田てん

順禮死ぬる道のかげろふ

何よりも蝶の現ぞあはれなる

文書かきほどの力さへなき

羅うらものに日をいとほるゝ御かたち

熊野みたきと泣給ひけり

手束弓紀の關守が頑かたくなに

酒さけではげたるあたまなる成覽らん

水 頌 翁 水 頌 翁 水 頌 翁 水 頌 翁 水

○双六の目―鞍子の目なり。

俳諧七部集

一五四

双六の目をのぞくまで暮かゝり  
假の持佛にむかふ念佛  
中く土間に居れば蚤もなし  
我名は里のなぶりもの也  
憎れていらぬ躍の肝を煎  
月夜く明渡る月  
花薄あまりまねけばうら枯て  
唯四方なる草庵の露  
一貫の錢むつかしと返しけり  
醫者のくすりは飲ぬ分別  
花咲けば芳野あたりを欠廻  
蛇にさゝるゝ春の山中

翁十二

翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩

○唯四方なる―簡素なる方丈の草庵を云ふ。  
○むつかしと―面倒なりとの意。

○欠―駈けの宛字。

珍碩十二

曲水十二

○いろくの名もむつかしや春の草  
本と思はるゝもの、及び  
享保廿年の翻刻本には發  
句「いろくの名もまぎ  
らはし春の草」脇「うた  
れて蝶の目を覺しぬる」とあり。後ち本文の如く改めしものなるべし。

○小六―「小六ついたる竹の杖」などと唄ひし古き小唄。

いろくの名もむつかしや春の草  
うたれて蝶の夢はさめぬる  
蝙蝠ののどかにつらをさし出て  
駕籠のとをらぬ峠越たり  
紫蘇の實をかますに入るゝ夕ま暮  
親子ならびて月に物くふ  
秋の色宮ものぞかせ給ひけり  
こそぐられてはわらふ佛  
うつり香の羽織を首にひきまきて  
小六うたひし市のかへるさ

珍 碩  
路 翁

通 同 碩 同 通 同 碩 同 通 同 碩 同

ひさご集

一五五

○庄野—伊勢、龜山の附近。東海道、参宮道の要路。

○和日—古俳書にノドカ、(鷹筑波「日影指椿の邊は和日にて」、又ウラ、カ(春庭樂「質物語癒す和日」)等とよめり。こゝはノドカと訓むべし。  
○越—越人。

鮎釣のちいさく見ゆる川の端  
念佛申ておがむみづがさ  
こしらえし薬もうれず年の暮  
庄野、里の犬におどされ  
旅姿稚き人の姫つれて  
花はあかいよ月は朧夜  
しほのさす縁の下迄和日なり  
生鯛あがる浦の春哉  
此村の廣きに醫者のなかりけり  
そろばんをけばものしりといふ  
かはらざる世を退屈もせず  
また泣出す酒のさめぎは  
ながめやる秋の夕ぞだゞびろき

荷

通 同 碩 同 通 同 碩 同 通 兮 人 兮 越 兮 同 碩 同 通

○文珠—文珠は釋迦の弟子中智慧第一。槃特は最も愚痴なりしがなほよく悟道に入れり。  
○ひしほ味噌—なめ味噌。

○かゝへ—香を含みもつをいふ。枕草子に「汗の香すこしかゝへたるきぬの薄きをひきかづきて」。

蕎麥眞白に山の洞中  
うどんうつ里のはづれの月の影  
すもゝもつ子のみな裸むし  
めづらしやまゆ烹也と立とまり  
文珠の智慧も槃特が愚癡  
なれ加減又とは出来ひしほ味噌  
何ともせぬに落る釣棚  
しのぶ夜のおかしうなりて笑出  
逢ふより顔を見ぬ別して  
汗の香をかゝえて衣をとり残し  
しきりに雨はうちあけてふる  
花ざかり又百人の膳立に  
春は旅ともおもはざる旅

人 兮 人 兮 人 兮 人 兮 人 兮 同 人 同 兮 同 人 同 兮 同

珍碩九

翁一

路通八

荷兮十

越人八

城下

○鐵炮の—鐵炮の稽古は四月より初む。

○ますほの小貝—ますほはますほに同じく赤色の小貝をいふ。

○なまぬる—微温湯。

○物もうの聲—案内を乞ふ聲。

鐵炮の遠音に曇る卯月哉  
 砂の小麥の瘦てはらく  
 西風にますほの小貝拾はせて  
 なまぬる一つ鯛ひかねたり  
 碁いさかひ二人しらせる有明に  
 秋の夜番の物もうの聲

野徑  
 里東  
 泥土  
 乙州  
 怒誰  
 珍碩

○おそはれ—隠はれ。原本

「おれはれ」とあり、これはその誤なるべし。

○川原咄し—四條川原の芝居の取沙汰なり。

○丁百—九六錢（錢九十六文を百文に通用せしむるをいふ）に對して錢百文を百文とすること。

女郎花心細氣におそはれて  
 目の中おもく見遣がちなる  
 けふも又川原咄しをよく覺へ  
 顔のおかしき生つき也  
 馬に召神主殿をうらやみて  
 一里こぞり山の下の下  
 見知られて岩屋に足も留られず  
 それ世は泪雨としぐれと  
 雪舟に乗越の遊女の寒さうに  
 壹歩につなぐ丁百の錢  
 月花に庄屋をよつて高ぶらせ  
 糞しめの鹽のからき早蕨  
 くる春に付ても都わすられず

筆  
 野徑  
 里東  
 泥土  
 乙州  
 怒誰  
 泥土  
 野徑  
 乙州  
 珍碩  
 怒誰  
 里東

半氣違の坊主泣出す  
 のみに行居酒の荒の一騾  
 古きばくちののこる鎌倉  
 時くは百姓までも烏帽子にて  
 配所を見廻ふ供御の蛤  
 たそがれは船幽靈の泣やらん  
 連も力も皆座頭なり  
 から風の大岡寺繩手吹透し  
 蟲のこはるに用叶へたさ  
 糊剛き夜着にちいさき御座敷て  
 夕邊の月に菜食嗅出す  
 看經の嗽にまぎるゝ咳氣聲  
 四十は老のうつくしき際

珍 乙 野 怒 泥 乙 野 里 珍 泥 怒 野 乙 珍  
 頌 州 徑 誰 土 州 徑 東 頌 土 誰 東 頌

○大岡寺繩手—龜山と關との間十八丁の啜なり。  
 ○蟲のこはる—腹の痛むなり。  
 ○ちいさき—きはきの誤。  
 ○御座—莫産なり。  
 ○咳氣聲—風邪聲。

○細め—細目。  
 ○杉村—杉のむら立。

髪くせに枕の跡を寐直して  
 酔を細めにあけて吹るゝ  
 杉村の花は若葉に雨氣づき  
 田の片隅に苗のとりさし

乙 野 怒 泥  
 州 徑 誰 土

野徑六  
 里東六  
 泥土六  
 乙州六  
 怒誰六  
 珍頌五  
 筆一

○雜—發句雜の句の時は第三にて當季を定む。

○龜の甲—大鏡に「老龜烹  
不<sub>レ</sub>爛移<sub>ニ</sub>禍於古桑<sub>一</sub>とい  
ふ古詩の故事を説けり。  
○牛糞—根本律の二鶯一籠  
の故事を以て迎へたるな  
り。  
○からうす—碓。

○風呂—茶の湯の風爐か。

○かますご—いかなごに同  
じ。  
○卷櫛—細にて卷きたる  
櫛。

○鳥羽—山城乙訓郡。  
○ちいめき—俳諧初學抄・  
毛吹草等に秋の詞とせ  
り。小鳥などの鳴きさわ  
ぐをいふ。落穂集(寛文  
三年)つがひみてちいめ  
くや姥鳴の聲 家定「炭  
俵」ちいめきの中でより  
出するりほあか 孤屋「  
霜折れ—天氣の曇りて寒  
きこと。又空曇りて霜の  
降らぬ事なりと。  
○鉢いひならふ—托鉢して  
食を乞ふ聲を出しならふ  
なり。  
○傳馬—原本轉馬に作る。  
今改む。  
○廻り口—受持のところ。  
○いきりたる—勢ひ立つた  
る。  
○鯉棚—鯉店なり。

俳諧七部集

一六二

龜の甲烹らるゝ時は鳴もせず  
唯牛糞に風のふく音  
百姓の木綿仕まへば冬のきて  
小哥そろゆるからうすの繩  
獨寐て奥の間ひろき旅の月  
蟪蛄落てきゆる行燈  
秋萩の御前にちかき坊主衆  
風呂の加減のしづか成けり  
鶯の寒き聲にて鳴出し  
雪のやうなるかますごの塵  
初花に雛の卷櫛居ならべ  
心のそこに戀ぞありける  
御簾の香に吹そこなひし笛の役

乙 州  
珍 碩  
里 東  
探 志  
昌 房  
正 秀  
及 肩  
野 徑  
二 嘯  
乙 州  
珍 碩  
里 東  
探 志

寐ごとにて起て聞ば鳥啼  
錢入の巾着下て月に行  
まだ上京も見ゆるやゝさむ  
蓋に盛鳥羽の町屋の今年米  
雀を荷ふ籠のちいめき  
うす曇る日はどんみりと霜おれて  
鉢いひならふ聲の出かぬる  
染て憂木綿裕のねずみ色  
撰あまされて寒きあけぼの  
暗がりに藥罐の下をもやし付  
傳馬を呼る我まわり口  
いきりたる鍵一筋に挾箱  
水汲かゆる鯉棚の秋

昌 房  
正 秀  
及 肩  
野 徑  
二 嘯  
乙 州  
珍 碩  
里 東  
探 志  
昌 房  
正 秀  
及 肩  
野 徑

ひきご集

一六三

○して―切籠灯籠に垂れたる房。

○最上―出羽。

○上茨―屋根を葺くなり。

○せちご―節衣の轉といふ。正月着など節日に着る晴着をいふ。

さはくくと切籠の紙手に風吹て  
奉加の序にもほのか成月  
喰物に味のつくこそ嬉しけれ  
煤掃うちには次に居替る  
目をぬらす禿のうそにとりあげて  
こひにはかたき最上侍  
手みじかに手拭ねぢて腰にさげ  
繩を集る寺の上茨  
花の比晝の日待に節ご着て  
さゝらに狂ふ獅子の春風

二 乙 珍 里 探 昌 正 及 野 二  
嘯 州 頌 東 志 房 秀 肩 徑 嘯

乙州四  
珍頌同  
里東四

探志同  
昌房同  
正秀同  
及肩同  
野徑同  
二嘯同

田野

○角大師―元三大師の書像なりとて俗に兩角ある鬼形の繪を門戸等に貼り、又蟲除けのため竹に挟みて田疇に立て、呪とす。  
○背太―鳥の一種。  
○わやくに―無茶に。無暗に。  
○利休の家―利休好みの家。

疇道や苗代時の角大師  
明れば霞む野鼠の顔  
背ぶとのわやくに鳴し春の空  
かまゑおかしき門口の文字  
月影に利休の家を鼻に懸

正 珍 秀 同  
同 秀 同 頌



○虫は皆古今集に「秋風にほころびぬらし藤袴つづれさせてふきりなくす鳴くし。」

度く芋をもらはるゝなり  
虫は皆つゞれくと鳴やらむ  
片足くの木履たづぬる  
誓文を百もたてたる別路に  
なみだぐみけり供の侍  
須磨はまだ物不自由なる臺所  
狐の恐る弓かりにやる  
月氷る師走の空の銀河  
無理に居たる膳も進まず  
いらぬとて大脇指も打くれて  
獨ある子も矮鶏に替ける  
江戸酒を花咲度に戀しがり  
あいの山彈春の入逢

同 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

○間の山伊勢古市の間の山よりはじまれる小唄。

○禪門法體したるをいふ。

○藤垣藤にてかきたる窓なり(標註)。  
○いにさま行きがけ。

○秋入初る秋の收穫が初まる。

○澤山にえらさうに。  
○叱られ原本吃られに作る。今改む。

雲雀啼里は厩糞かき散し  
火を吹て居る禪門の祖父  
本堂はまだ荒壁のはしら組  
羅綾の袂しぼり給ひぬ  
齒を痛人の姿を繪に書て  
薄雪たはむすすき瘦たり  
藤垣の窓に紙燭を挟をき  
口上果ぬいにさまの時宜  
たふとげに小判かぞふる革袴  
秋入初る肥後の隈本  
幾日路も苦で月見る役者船  
す布子ひとつ夜寒也けり  
澤山に元めくと叱られて  
ひさご集

碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

○御小人―雜役驅使等に從ふ卑しき武士の職名。又小者(コモノ)ともいふ。○やしほ―八入。色の濃きをいへり。

呼よびありけども猫は歸らず  
子規御お小人こびと町の雨あがり  
やしほの楓木の芽萌もえ立ち  
散花に雪踏ひき挽ひきづる音ありて  
北野の馬場にもゆるかけろふ

正秀十九

珍碩十七

秀 碩 秀 碩 秀

寺町二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

猿

蓑

乾 坤

○おもて起—「まことに月花もおもておこすべき時なれや」(舉白集)

○五徳—大鏡には徳元の初學抄などにいへる五徳にあらずして、こは温良恭儉讓の五なりといへり。  
○骨にて人を作り—この事撰集抄第四、高野參ノ事付骨ニテ人ヲ造ル事に見ゆ。

○斷腸—白氏文集に「猿過二平陽—始斷腸」。

○元祿辛未—以下雲竹書まで後刷本になし。

晋 其角序

誹諧の集つくる事、古今にわたりて此道のおもて起おこすべき時なれや。幻術の第一として、その句に魂の入されば、ゆめにゆめみるに似たるべし。久しく世にとゞまり、長く人にうつりて、不變の變をしらしむ。五徳はいふに及ばず、心をこらすべきたしなみなり。彼西行上人の、骨にて人を作りたて、聲はわれたる笛を吹やうになん侍ると申されける、人には成て侍れども、五の聲のわかれざるは、反魂(お)の法の(お)をろそかに侍にや。さればたま(ひ)しるの人たらば、アイウエ(エオ)ヲよくひゞきて、いかならん吟聲も出ぬべし。只誹諧に魂の入たらむにこそとて、我翁行脚のころ、伊賀越しける山中にて、猿に小蓑を着せて、誹諧の神を入たまひければ、たちまち斷腸のおもひを叫びけむ、あだに懼るべき幻術なり。これを元として此集をつくりたて、猿みのは名付申されける。是が序もその心を取り魂を合せて、去來凡兆のほしげなるにまかせて書。

元祿辛未歲五月下弦

雲 竹書

猿

蓑

一七一

猿蓑集 卷之一

冬

○時雨き「き」は「る」の誤との説あれど連歌にも「時雨れき」とつづけたる例多し。  
 ○いさゝ長き一寸許、頭まるく、はぜに似たり。  
 ○廣澤—洛西嵯峨にある池。  
 ○沼太郎—鴻(ヒシクヒ)の一種。本朝食鑑卷五、鴻の條「菱喰(中略)又近俗有稱惠登菱喰、或稱沼太郎、又曰酒類大抵與菱喰、同而眼上有淡白條、旁脚皆黑」。  
 ○ぬかれて—欺かれて。

初しぐれ猿も小篋をほしげ也  
 あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲  
 時雨きや並びかねたる魴ぶね  
 幾人かしぐれかけぬく勢田の橋  
 鏈持の猶振たつるしぐれ哉  
 廣澤やひとり時雨る沼太郎  
 舟人にぬかれて乗し時雨かな  
 伊賀の境に入て  
 なつかしや奈良の隣の一時雨  
 芭蕉 其角 千那 丈艸 膳所正秀 史邦 尙白 會良

○竹田—山城伏見の附近。句は「山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ行く君を思へば」の歌による。

○初霜に—劉元叔の詩句に「北斗星前横旅雁」。(和漢朗詠集)

○何とおよるぞ—狂言鞍猿「舟の中は何とおよるぞ。苦をしき寝に織をまくらに」の文句取。およるは寝るの義。

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり  
 馬かりて竹田の里や行しぐれ  
 だまされし星の光や小夜時雨  
 新田に稗殻煙るしぐれ哉  
 いそがしや沖の時雨の眞帆片帆  
 はつ霜に行や北斗の星の前  
 一いろも動く物なき霜夜かな  
 淀にて  
 伊賀百歳 膳所昌房 去來 野水  
 凡兆 大津乙羽紅 凡兆 同 其角

はつしもに何とおよるぞ船の中  
 歸花それにもしかん薙切レ  
 禪寺の松の落葉や神無月  
 百舌鳥のゐる野中の杭よ十月  
 こがらしや頬腫痛む人の顔  
 芭蕉 其角 凡兆 同 其角  
 嵐 凡兆 同 其角  
 蕉 蘭 兆 角

砂よけや蟹のかたへの冬木立  
ならにて  
凡兆

棹鹿のかさなり臥る枯野かな  
伊賀土芳

澁柿をながめて通る十夜哉  
膳所裾道

ちやのはなやほるゝ人なき靈聖女  
越人

みのむしの茶の花ゆへに折れける  
伊賀猿雖

古寺の簀子も青し冬がまゑ  
凡兆

翁の堅田に閑居を開て

雑水のなどころならば冬ごもり  
其角

この寒さ牡丹のはなのまつ裸  
伊賀車來

草津

晦日も過行らばがいのかかな  
尙白

神迎水口だちか馬の鈴  
珍碩

○十夜—十月五日より十六日に至る間、誦經念佛を修する淨土宗の法要。

○靈照女—龐居士の女、父に従つて終身嫁せず、竹細工を賣ぎて生活せり。

○雑水の—五元集には「幻住庵にて」と前書あり。

○姥が亥の子—近江草津の姥が餅をまかせたるなり。十月の亥の日に餅を食へば萬病を祓ふと云ひ、之を亥子餅と云ふ。

○神迎—十月晦日、出雲より歸り給ふ神を迎ふる祭事。

○水口—近江國、五十三次の一。

霜月朔旦

膳まはり外に物なし赤柏  
伊賀良品

水無月の水を種にや水仙花  
羽劔坂田不玉

今は世をたのむけしきや冬の蜂  
尾張且藁

尾頭のこゝろもとなき海鼠哉  
去來

一夜くさむき姿や釣干菜  
伊賀探丸

みちばたに多賀の鳥井の寒さ哉  
尙白

茶湯とてつめたき日にも稽古哉  
江戸龜翁

炭竈に手負の猪の倒れけり  
凡兆

住つかぬ旅のこゝろや置火燧  
芭蕉

寢ごゝろや火燧蒲團のさめぬ内  
其角

門前の小家もあそぶ冬至哉  
凡兆

木兎やおもひ切たる晝の面  
尾張芥境

○赤柏—増山井(季吟撰)に冬至にあらずといへども十一月朔赤豆飯を用ひ、之をあらがしはといふよし見ゆ。

○多賀—近江多賀神社。その鳥居は本社より半里餘をへだつる高宮にあり。

○寢ごゝろや—桃隣の粟津原(寶永七年刊)によれば其角旅先の芭蕉に此句を送り、其返句に「住みつかぬ」の句を書送りたりと。

○貧交―杜甫の貧交行にならへるなり。

○巴―千鳥の群れて渦巻くをいへり。

○矢田の野―越前。敦賀の南。

○なぐれ―餘り、ついで等の意。句は逆志抄に「浦邊に通ふなぐれに來鳴といふ意也」とある如く、浦まで來りし千鳥が、偶偶野までも逸れ來りて鳴くとの意。

○余吾の海―近江、琵琶湖の北にある小湖。

みづづくは眠る處をさゝれけり 伊賀半

貧交

まじはり紙子の切を譲りけり 丈  
 浦風や巴をくづすむら衛 會  
 あら磯やはしり馴たる友衛 去  
 狼のあと踏消すや濱千鳥 史  
 背門口の入江にのぼる千鳥かな 丈  
 いつ迄か雪にまぶれて鳴千鳥 千  
 矢田の野や浦のなぐれに鳴千鳥 凡  
 笈士の見かへる跡や鴛の中 木  
 水底を見て來た貞の小鴨哉 丈  
 鳥共も寝入てゐるか余吾の海 路  
 死まで操成らん鷹のかほ 且  
 藁 通 艸 節 兆 那 艸 邦 來 良 艸

○この木戸や―去來抄に初五、此木戸を柴戸と書誤りしを改めし由見ゆ。古板本に埋木して改めし跡歴然たり。なほ中七は平家月見の條「さ候は惣門は鎖のさされて候ぞ」の文句によりしならん。

○からじり―輕尻、本馬の半の量の荷をつけし駄馬。

○見やるさへ―卯辰集に「路通の行脚を送りて」と詞書あり。

○石部―近江。

○翁行脚の―奥細道の行脚なり。曾良も同行したれば次の句あるなり。竹戸は大垣の門人。なほ芭蕉の「紙袋の記」参照。

○白砂―玄關の前の白砂（白洲）を敷ける所。

○膝突―公事などのをり膝の下に敷く半疊程の敷物。

襟卷に首引入て冬の月 杉  
 この木戸や鎖のさゝれて冬の月 其  
 からじりの蒲團ばかりや冬の旅 長崎暮  
 見やるさえ旅人さむし石部山 大津尼智  
 翁行脚のふるき袋をあたへらる。記あり略之  
 首出してはつ雪見ばや此袋 美濃竹  
 題竹戸之袋 戸

疊めは我が手のあとぞ紙袋 會  
 魚のかげ鶴のやるせなき氷哉 探  
 しづかさ敷珠もおもはず網代守 丈  
 御白砂に候す 艸

膝つきにかしこまり居る霰かな 史  
 櫻欄の葉の霰に狂ふあらし哉 野  
 童 邦

○はつ雪や―五元集に「立徘徊」と前書あり。白氏文集、「人被鶴鷺立徘徊」。

○わきも子―我妹子。

○下京や―此五文字は芭蕉の置けるよし去來抄に見ゆ。

○穗屋の薄―信濃御射山祭は七月廿七日にして芒もて御假屋を作る。故に穗屋の神事ともいふ。此句更科紀行のをりの吟かといふ。

○簾もあげず―白樂天の「香爐峰雪撥簾看」の句による。

鶺鴒の橋よりこぼす霰かな 伊賀示 蜂  
 呼かへす鯛賣見えぬあられ哉 膳所畫 凡 兆  
 みぞれ降る音や朝飯の出來る迄 膳所畫 其 好  
 はつ雪や内に居さうな人は誰 史 邦 角  
 初雪に鷹部屋のぞく朝朗 史 邦 角  
 霜やけの手を吹てやる雪まろげ 羽 紅  
 わきも子が爪紅粉のこす雪まろげ 探 丸  
 下京や雪つむ上の夜の雨 凡 兆  
 ながくと川一筋や雪の原 同  
 信濃路を過るに  
 雪ちるや穗屋の薄の刈残し 芭 蕉  
 草庵の留主をとひて  
 衰老は簾もあげず菴の雪 其 角

○てしまごさ―攝津豐島郡より産する筵（攝陽群談）。

○青亞―大津の蕉門。

○乾鮭も―赤草紙に此句心の味をいひとらむとて苦心せるよし見ゆ。

○白し―五元集には「白き」

○乙州が新宅にて―元祿二年の暮、乙州が家に滞在せる折の吟。

雪の日は竹の子笠ぞまさりける 尾張羽 笠  
 誰ととも健すこやかならば雪のたび 長崎 卯 七  
 ひつかけて行ゆくや雪吹のてしまごさ 去 來  
 青亞追悼  
 乳のみ子に世を渡したる師走哉 尙 白  
 から鮭も空也の瘦も寒の内 芭 蕉  
 鉢たゝき憐は顔に似ぬものか 乙 効  
 一月は我に米かせはちたゝき 丈 艸

住吉奉納

夜神樂や鼻息白し面おもての内 其 角  
 節季候に又のぞむべき事もなし 伊賀順 琢  
 家くやかたちいやしきす、拂 同 祐 甫

乙州が新宅にて

○弱法師—物もらひ也、師走門々に、餅を貰ふの札を張るなり(撮解)。

○薄壁の—今年と來年と一夜のへだてを薄壁に喩へしなり。

○手の置かれたる—手をおくとは、憚る、遠慮する等の意。

○やりくれて—やりくりして一年も暮れての意か。

○くだり—「領」。袴等をかぞへる語。

人に家をかはせて我は年忘  
弱法師我門ゆるせ餅の札  
歳の夜や曾祖父を聞けば小手枕  
うす壁の一重は何かとしの宿  
くれて行年のまうけや伊勢くまの  
大どしや手のをかれたる人ごゝろ  
やりくれて又やさむじろ歳の暮  
いねくと人にいはれつ年の暮  
年のくれ破れ袴の幾くだり

芭蕉 其角 長和 去來 同羽 羽紅 其角 路通 杉風

猿蓑集 卷之二

夏

○面おこす—其角序参照。

○野を横に—那須野にての吟。奥の細道参照。

○角櫓—城郭の隅々に建ててある櫓。

有明の面おこすやほととぎす  
夏がすみ曇り行衛や時鳥  
野を横に馬引むけよほととぎす  
時鳥けふにかざりて誰もなし  
ほととぎす何もなき野の門構  
ひる迄はさのみいそがず時鳥  
蜀魂なくや木の間の角櫓  
入相のひゞきの中やほととぎす  
ほととぎす瀧よりかみのわたりかな

其角 木節 芭蕉 尙白 凡兆 智月 史邦 羽紅 丈艸



○奥州―白雪の誹諧曾我  
(元祿十二年刊)に奥州の  
名にて此句出で「かれハ  
嶋原の太夫云々」とあり。

○千鳥もかるや―無名抄に  
祈盛法師寒夜の千鳥とい  
ふ題にて「千鳥もかるや  
鶴の毛衣」とよみしこと  
見ゆ。

○うき我を―この句始め伊  
勢長島大智院にてよみ下  
五「秋の寺」といへり。同  
寺に今その眞蹟を藏す。  
嵯峨日記にも出づ。

○若楓―曲水より芭蕉への  
文通には「我住ところ弓  
杖二丈ばかりにして楓一  
本外は青き色を見ず」と  
詞書あり。

○慈母墓―其角の母は貞享  
四年四月八日歿す。享年  
五十七。法名妙務尼。  
墓は芝の二本榎、上行寺  
にあり。

○別僧―旅寢論に路通の由  
見ゆ。

○供られて―供せられて。

○亡人―杜國は元祿三年二  
月廿日歿。

○淺々―清淺の意。「朝々」  
の誤かとの説もあり(大  
鏡)。去來の句にも「朝々  
の葉のはたらきや杜若」。

○起出て―下句「心やもと  
の心なるらん」(標註)。  
○起々―朝起きたばかりの  
時。

○木べ屋―新小屋。

○豊國―京都豊國神社。秀  
吉の壯圖を咏みしなり。

心なき代官殿やほとゝぎす 去來  
こひ死しなば我塚でなけほとゝぎす 遊女奥あ 劔

松島一見の時、千鳥もかるや鶴の毛衣とよめりければ

松島や鶴に身をかれほとゝぎす 曾良  
うき我をさびしがらせよかんこ鳥 芭蕉

旅館庭せまく庭草を見ず

若楓茶いろに成なるも一さかり 膳所曲水

四月八日詣慈母墓

花水にうつしかへたる茂り哉 其角  
葉がくれぬ花を牡丹の姿哉 江戸全峯

別僧

ちるときの心やすさよ米囊メシ花ハナ 越人  
智恵の有る人には見せじけしの花 珍碩

翁に供られてすまあかしにわたりて

似合しきけしの一重や須磨の里 亡人杜國  
青くさき匂もゆかしけしの花 嵐蘭  
井のすゑに淺々清し杜若 半殘  
起↑の心うごかすかきつばた 仙花

題去來之嵯峨落柿舎 二句

豆植る畑も木べ屋も名處哉 凡兆  
破垣やわざと鹿子のかよひ道 曾良

南都旅店

誰のぞくならの都の閨の桐 千那  
洗濯やきぬにもみ込柿の花 尾張薄芝

豊國にて

○稚き時の一若竹をかける此句の自畫眞蹟にみづからかき捨たる繪の反古を見出しけるに少年のむかしこひしくなりて云云」とあり。

○ともし一照射。夏山の狩なり。

○筑摩祭一近江坂田郡筑摩神社の祭。四月一日行はれ、女は關係せる男の數だけの鍋を頭に冠る俗あり。句は聖代の風教正しきをいへり。

○粽ゆふ一赤册子に物語の姿も一集にはあるべきものとて此句を送れる由見ゆ。

○五月六日一元和元年五月六日大阪役にて蟬吟(良忠)の曾父藤堂良勝討死す。此句はその五十回忌たる寛文四年の吟なり。

竹の子の力を誰にたとふべき  
たけの子や畠隣に悪太郎  
たけのこや稚き時の繪のすさび  
猪に吹かへさるゝともしかな  
凡兆  
去來  
芭蕉  
正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月  
君が代や筑摩祭も鍋一ツ  
越人

五月三日わたましせる家にて

屋ね茸と並てふける菖蒲哉  
粽結ふかた手にはさむ額髪  
限篠の廣葉うるはし餅粽  
さびしさに客人やとふまつり哉  
其角  
芭蕉  
江戸岩翁  
尙白

五月六日大坂うち死の遠忌を弔ひて

大坂や見ぬよの夏の五十年  
伊賀蟬吟

奥羽高館にて

夏草や兵共がゆめの跡  
這出よかひ屋が下の蟾の聲  
芭蕉

此境はひわたるほどよいへるもこの事にや

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石  
五月雨に家ふり捨てなめくじり  
ひね麥の味なき空や五月雨  
馬士の謂次第なりさつき雨  
同  
凡兆  
木節  
史邦

○實方一一條天皇の御時、行成と口論したる罪により、歌枕見て參れとて陸奥に貶せられ、長徳四年十二月彼地に歿す。

○はひわたる一源氏須磨卷に「明石の浦はたゞはひわたる程なれば」。

○かひ屋一諸説あれども、此句は蠶の飼屋なり。出羽尾花澤清風亭にての吟。

奥羽名取の郡に入て、中將實方の塚はいづくにやと尋侍れば、道より一里半ばかり左の方、笠島といふ處に有とをしゆ。ふりつづきたる五月雨いとわりなく打過るに  
笠島やいづこ五月のぬかり道  
芭蕉

○はてなし坂―大和吉野郡南十津川にあり。元祿二年頃、叔母の田上尼と熊野巡禮に出でたる時の吟。一八八頁田上尼の句参照。  
○つゞくりも―道普請も長びき五月雨も降りつゞくとなり。

つゞくりもはてなし坂や五月雨 去 來  
髪剃や一夜に金情て五月雨 凡 兆  
日の道や葵傾くさ月あめ 芭 蕉  
縫物や着もせでよごす五月雨 羽 紅

○老醫―五元集に「村田忠庵が事也」と。

○古來稀なる年―七十歳をいふ。杜甫の詩句に「人生七十古來稀」。

○六尺―駕昇。

○しがらき―近江甲賀郡信樂。茶の名産地。

七十餘の老醫みまかりけるに、弟子共こぞりてなくまゝ、予にいたみの句乞ける。その老醫いまそかりし時も、さらに見しれる人にあらざりければ、哀にもおもひよらずして、古來まれなる年にこそといへど、とかくゆるさゞりければ  
六尺も力おとしや五月あめ 其 角  
百姓も麥に取つく茶摘哥 去 來  
しがらきや茶山しに行夫婦づれ 正 秀

○游刃―原本游刃と誤れり。この句嵯峨日記によれば去來の吟と見ゆ。

○麥藁の―兒童の遊びに麥稈にて雨蛙の家を作ることあり。

つかみ合子共のたけや麥島 膳所游 刀  
孫を愛して  
麥藁の家してやらん雨蛙 智 月  
麥出來て鯉迄喰ふ山家哉 江戸花 紅  
しら川の關こえて

○風流の、眉掃を―奥の細道参照。

風流のはじめや奥の田植うた 芭 蕉  
出羽の最上を過て  
眉掃を面影にして紅粉の花 同  
法隆寺開帳、南無佛の太子を拜す  
御袴のはづれなつかし紅粉の花 千 那  
田の畝の豆つたひ行螢かな 伊賀萬 乎

○田の畝の―此句、去來抄によればもと凡兆の句なる由。

○鳩―鳩の湖をいへり。

螢火や吹とばされて鳩のやみ 去 來

膳所曲水之樓にて

勢田の螢見 二句

闇の夜や子共泣出す螢ぶね 凡兆  
ほたる見や船頭酔ておぼつかな 芭蕉

三熊野へ詣ける時

螢火やこゝおそろしき八鬼尾谷 長崎田上尼  
あながちに鶴とせりあはぬかもめ哉 尙白  
草むらや百合は中々はなの貞 半殘

病後

空つりやかしらふらつく百合の花 大坂何處  
すゞ風や我より先に百合の花 乙羽

燒蚊辭を作りて

子やなかん其子の母も蚊の喰ン 嵐蘭  
餞別

○ほたる見や―泊船集に上五「ほたる火や」。

○三熊野―本宮、新宮、那智の熊野三社。

○八鬼尾谷―熊野山中にあり(標注)。

○空つり―逆上をいふ(標注)。

○燒蚊辭―風俗文選に出づ。

○子やなかん―萬葉集、山上憶良の歌「憶良らは今はまからむ子なくらむその子の母もわを待つらむぞ」。

○うとく―有徳。金持ちをいふ。

○吉次―金賣吉次が牛若丸を伴ひて下れるに比せしなり。

○下闇や―勸進帳に「六本木にて」と前書あり。木下闇の蟬聲は土中のまゝの聲かと疑はるとの意。

○白雨―夕立。貞徳の「御傘」に、此文字貞徳が書始めし由見ゆ。

立さまや蚊屋もはづさぬ旅の宿 膳所里東  
うとく成人につれて、參宮する従者にはなむけして

みじか夜を吉次が冠者に名殘哉 其角  
隙明や蚤の出て行耳の穴 丈艸  
下闇や地虫ながらの蟬の聲 嵐雪  
客ぶりや居處かゆる蟬の聲 膳所探志  
頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲 芭蕉  
哀さや盲麻刈る露のたま 伊賀槐市  
渡り懸て藻の花のぞく流哉 凡兆  
舟引の妻の唱哥か合歡の花 千那  
白雨や鐘さゝはづす日の夕 史邦  
素堂之蓮池邊

白雨や蓮一枚の捨あたま 嵐蘭  
猿蓑集 卷之二 一八九